

台湾情報誌

# 交流

2013年4月 vol.865

公益財団法人 交流協会  
Interchange Association, Japan



鴻海（ホンハイ）における発展の謎を探る

# 交流

2013年4月  
vol. 865

## 目次

## CONTENTS

鴻海(ホンハイ)における発展の謎を探る (朝元照雄)	1
「日台ビジネス・アライアンス 現状と課題 相互補完性と日本経済活性化」 (海老原信義)	12
台湾ランニング事情第3回 2012 台北マラソン (石原忠浩)	20
日台青年交流事業	26
【台湾海峡をめぐる動向】 (2012年2月~2013年3月) 馬英九政権、尖閣諸島問題で中国とは連携しないと明確に表明 (松本充豊)	37
コラム:日台交流の現場から 宝塚歌劇団の台湾初公演~ 心が通い合う、感動的大成功!	50
編集後記	52

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

### ●● 交流協会について ●●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。



## 鴻海（ホンハイ）における発展の謎を探る

九州産業大学 経済学部  
教授 朝元照雄

### はじめに

2012年3月27日、シャープの液晶テレビの巨額赤字（3月期の連結最終損益が3800億円の赤字）のため、町田勝彦会長は相談役に退くことになった。片山幹雄社長は代表権のない会長に、奥田隆司常務執行役員は社長に昇格した。同時に、鴻海（ホンハイ）グループは1330億円をシャープ本体に9.9%出資し、筆頭株主になる予定である。郭台銘（テリー・ゴウ = Terry Gou）は個人で669億円を堺工場（世界唯一の第10世代液晶パネルライン）のシャープディスプレイプロダクト（SDP）に出資し、持ち株比率は46.5%であり<sup>1</sup>、これが契約の中身である。「黒衣役に徹する企業」によるブランド企業の出資であり、一躍注目を浴びるようになった。

2011年12月期の鴻海の連結売上高は3兆4,526億8,127万台湾元（約9兆6,700億円）、最終（当期）利益は815億9,099万台湾元に達した。この金額は日本電機トップの日立製作所（2012年3月期連結売上高9兆6,658億円）に匹敵し、パナソニック（同・7兆8,462億円）、ソニー（同・6兆4,932億円）、東芝（同・6兆1,002億円）を凌駕している<sup>2</sup>。また、別の資料によると、鴻海の時価総額（2012年5月24日時点）は308億ドルと売上高（2011年度）は1,027億ドルに達した。同じく、この金額はパナソニックの165億ドルと986億ドル、ソニーの140億ドルと816億ドル、シャープの55億ドルと308億ドルを圧倒している<sup>3</sup>。

本論は鴻海とはどんな企業なのか、なぜ世界最大のEMS（電子機器受託製造サービス）企業になったのか、鴻海の沿革に沿って、いくつかの時



鴻海精密工業の本部

期に分けて観察する。

### I. 草創期（1974～1980年）

この節は鴻海の沿革をいくつかの時期に分けて考察する。1974～80年は鴻海の草創期で、事業の模索および学習の段階である。

郭は中国海事専科学校（現在の台北海洋技術学院の前身）の航運管理科を卒業後、1973年に兵役を終えて（台湾では健康な男子は兵役の義務がある）、台北駅近くの館前路の復興航運会社に勤務し、輸出貨物の船便期日アレンジなどの業務を担当していた。この時期、台湾の輸出志向工業化期であり、業者の船便期日に合わせるような状況から、郭は製品の輸出にはビジネスチャンスがあることに気がついた<sup>4</sup>。

1974年、24歳の郭台銘氏は投資資本額30万台湾元を集めて、「鴻海プラスチック企業有限公司」を設け、プラスチック製品の製造加工を行っていた。この30万台湾元は友人との出資で、郭氏の出資分の10万台湾元は母親・郭初永真（本籍は山

東煙台)が無尽講で入手したものである。企業名「鴻海」の由来は、「鴻飛千里、海納百川」(鴻(大きな雁)は千里を飛び、海はすべての川を納める)という意味で、企業が大きく羽ばたくよう期待した縁起がいいネーミングである。

鴻海はプラスチック製の「白黒テレビの選局つまみ」の製造から始まった。この時期の鴻海は台湾の多くの中小・零細企業と同じようにスタートしたが、当時の従業員は15人で、月当たりの売上額は約8万台湾元である。借家の狭い25坪の建屋を工場にしていた。鴻海の設定時は第1次石油危機に遭遇し、原料の価格高騰、世界規模の不況により、資金不足、経験不足のため、大量生産や安定した出荷ができず、経営状況は大変困難で、わずか1年で資金が殆ど使い切った。翌年、パートナーが次々この事業から撤退したため、郭氏は銀行や義父から70万台湾元を借り、自らこの企業を引き受けて、1975年に企業名を「鴻海工業有限公司」と新たに変更した。

1976年に鴻海は台北近郊・板橋の工場に引越し、プラスチック部品のテレビ用「高圧陽極キャップ」を製造するようになった。この時期はプラスチック押し出し成型機械を使い、家電用プラスチック部品を製造していた。

当時、台湾のテレビは白黒テレビが主流であり、鴻海が必要とする金具は台北の三重堤防近くの金具工場に依頼し、作ってもらったものである。当時の台湾の金具工場は徒弟制度で、好景気になると、弟子は独立して開業し、人材の流動は大変早い。それによって、金具の品質が不安定であった。この経験から郭は外部の金具師に頼ることが出来ないと考え、その後、自らの金具部門を構築することになった<sup>5</sup>。

1977年、鴻海の資本額は200万台湾元に達し、郭は金具機器の製造に投資して、自らの金具工場を建てることを決めた。台北近郊の土城の永福宮廟の裏に1坪3800台湾元の土地を購入した。自

社のプラスチック金具機器を持つことによって、鴻海は積極的にビジネスを展開することになった。鴻海の最初の標準生産ラインは板橋の中山路の工場で構築したものであり、のちになってからこのような積極的な投資の選択が正しかったことがわかった。

1977年に大同公司などから電子用精密プラスチック部品、1978年にカラーテレビ用変圧器の高圧線筐体ユニット、1979年に米式電話ソケット部品のOEMを請負うようになった。しかし、この時期の鴻海の売上額は不安定であり、主な理由はOEM生産のため、相手の製品の機種別の販路に直接的に影響を受けやすいことであった。1980年に鴻海は中和連城路の工場を拡充し、テレビとラジオの部品を製造するようになった。それに、メッキ部門を設置し、生産能力を向上させた。

前に述べたように、鴻海の草創期は主として家電のプラスチック部品からスタートし、それに金具の重視によってこの分野で実力を蓄積するようになったことがわかる。事実上、この時期の鴻海は台湾で見られる多くの中小企業と同じようであり、のちに鴻海が世界最大のEMS企業に躍進することを誰も予想することができなかったのである。

## II. 海外進出準備期 (1981~1990年)

1980年代になると、テレビやラジオなどは成熟製品になり、多くの企業が倒産の危機に直面した。市場動向調査のあと、郭はパソコンの発展趨勢を認識するようになり、パソコンのコネクターの開発にターゲットを絞るようにした。その理由は当時の鴻海はコネクターの約50%の技術を持っていたが、残りの50%を克服することが、完全に未知の領域への進出よりも容易であると考えたからである<sup>6</sup>。

1981年にコネクターを開発し、この製品の製造

領域に入るようになった。この成長期の鴻海の主力製品にコネクタを加えたことによって、「鴻海＝コネクタ製造企業」ということが認識されるようになった。

1982年に資本額1600万元を投資し、企業名を「鴻海精密工業股份(株)有限公司」に変更して、パソコン用電線・ケーブル組立の領域に進出するようになった。同年、鴻海は土城中山路に自社の工場用地を購入し、この工場の敷地面積は730坪であり、4階建ての建物で、4階は事務室と3階分の工場によって構成され、プレス工場、金具工場、メッキ工場、ソケットピン部品組立工場、D型パソコン用コネクタ組立、倉庫と食堂などに分かれていた。しかし、工場の面積が狭いために、プラスチック押出し型部門は外で工場を借りることになった。当時、鴻海の機器の9割は海外からの輸入設備を使用していた。

1983年に鴻海は日本から輸入された新しい設備でパソコン用のコネクタ(Full Ballow Edge Card Connector)を開発した。それによって、パソコン領域に進出するようになった。パソコンの発展によって、コネクタの需要も増加し、鴻海は年成長率20%を維持することができた。

金具部品の製造について、1984年に鴻海は金属メッキ部門を設け、アメリカから全自動連結ラインの選択メッキ設備およびメッキ検査設備を購入した。この設備は1000万台湾元であり、当時の鴻海の年売上額の1割を占めていた。1985年に金属プレス部門を設け、86年に日本から精密機械の製造技術を導入し、鴻海の製造技術のレベルは大幅に向上するようになった。1986年にスイスから連続高速プレス工作機械を導入し、情報センターを設置して、企業の生産能力を把握するようになった。1986年以前の鴻海のトップ10の顧客は宏碁(エイサー)、台達電子、光寶などであり、売上額の9割を占めていた。世界トップ10のコネクタ企業になるよう、鴻海も生産システムの

ソフト導入によって、コストダウンを図るようになった。1987年にアメリカから自動化設備を購入し、同年に1億台湾元を出資して48台の第4世代のコンピューター自動化制御機能付きのプラスチック押し出し成型機械を購入した。1988年から5S(整理、整頓、清掃、清潔、しつけ)運動を推進した。

1983年に台北県土城市の工場の操業を開始した。1986年に鴻海の資本額は1億3000万台湾元に達し、土城工業区の1万1600坪の土地を購入し、1988年に土城虎躍工場の新工場の第1期建屋、89年にこの新工場の第2期建屋が完成し、工場の総面積は4000坪に達し、年間生産額は10億台湾元に達した。1995年に第3期建屋の建設が開始された(写真・鴻海の本社ビル)。

アップル社と共同でパソコン内部の連結システムを開発した。この年に郭は初めて「5カ年計画」を発表し、鴻海を世界トップ20位以内のEMS企業に邁進するように目標をたてた。この年の従業員数は1000人に達し、売上額も10億台湾元を突破した。

1985年に鴻海はアメリカ支社を設け、「Foxconn」(フォックスコン)の自社ブランドを持つようになった。英語の「Foxconnとは、金具(foxcavaty)とコネクタ(connector)からの造語である<sup>7)</sup>。また、市場において鴻海は狐(fox)のように素早く動くように期待していた。

1988年にカリフォルニア州に子会社のFoxconn International Inc. (Santa Clara, CA, USA)、香港にFoxconn (Far East) Ltd. (HK)を設立し、パソコン部品のビジネスを行った。1987年7月に台湾では戒嚴令が解除され、同年11月に台湾住民の大陸への親族訪問および視察が許可されるようになった。このチャンスを見て、鴻海は対中進出を開始するようになった。香港の子会社を通じて、1988年に中国の深圳龍華工場を設立するようになった。このときに始めて中

国で「富士康」という名前を使うようにした<sup>8</sup>。

「富士康」とは「聚才乃壯、富士則康」（人材を集めれば、会社は壮大になり、人が富めば健康な生活ができる）という縁起の意味を含んでいる。1990年代初期、台湾の労働者賃金は月額1万台湾元で、中国の労働者賃金は月額500人民元（約2200台湾元）であり、両者の賃金差は約5倍である。最も重要なのは、台湾では労働者不足で、中国では多くの求職者がいる。それに、中国では大量な土地を供給することができた。

1989年にマレーシアの拠点を設置し、1992年にシンガポールにFoxconn Singapore PTE Ltd.を設立し、東南アジアの製造、設計および販売の業務を担当するようになった。1989年に欧州市場のビジネスのために、1989年にFoxconn Services & Logistics BV (Previous: Linosa BV) (Netherlands)を設立した。

鴻海は海外ブランド企業との協力によって、緊密なパートナーシップ関係を結び、顧客の信頼を獲得し、1989年に神達（マイタック）から無検査で入庫の資格を得て、1999年にHP（ヒューレット・パカード）社から購買者の品質評価鑑定が認可され、1991年にアップル社と共同でパソコン内部の連結システムの新型ユニットを開発した。1990年にコンパック社とパソコン用のコンタクターを開発し、インテル社と共同でコンタクターを開発した。

### Ⅲ．中国進出期（1991～2000年）

1991年6月に鴻海は念願の台湾証券取引所に株式上場を果たし、次のステップに邁進するようになった。それによって、鴻海企業グループは成長の基礎を築き上げ、次の成長の目標に挑戦する条件を備えるようになった。

この時期に鴻海は回路基板コネクタから「回路モジュールと回路モジュール用コネクタ」、

「システムとシステム用コネクタ」および「システムと電線・ケーブルユニット用コネクタ」に発展するようになった。

また、この時期にパソコン（特にデスクトップパソコン）市場が持続的に増加し、大手パソコン企業間の低価格競争に入るようになった。1995年にデル（Dell）社はパソコンのネットや電話による直接販売方式を採用し、低価格戦略によって販路を拡大するようになった。他方、コンパック（Compaq）社も1997年に1000ドル以下のパソコンを売り出し、熾烈な低価格競争に走るようになった。当時、日欧米のパソコンの普及率は50%未満のため、低価格戦略は普及率の向上には効果があった。

1998年にDell社はコンパック社のパソコン市場シェアを超え、低価格および製品のライフサイクルの短縮化のために、パソコン企業の収益悪化を招くようになった。ヒューレット・パカード（HP）、デル（Dell）、ゲットウェイ（Gateway）などの大手パソコンは低価格に対応し、受注生産（Build to Order: BTO）方式およびOEM企業に委託する生産方式を採用するようになった。当時、台湾では川上段階の部品から川中段階の組立加工まで、完全なサプライチェーンを持っていたために、それをサポートする能力を持っていた。つまり、過去の市場需給の予測による製造方式のBTF（Build to Forecasting）方式を放棄し、BTO方式という最終消費者からの受注による製造を採用するようになった。BTO方式の採用によって、需要予測と現実の販売数量の乖離を減らし、在庫量を減らすというメリットがあった。また、消費者のニーズの多様化に応じて、BTO方式戦略によるいくつかのパソコンの仕様（スペック）から選択するほかに、オプション（メモリー容量、本体の色彩、CD-RやDVD、Officeなどのソフト）の追加的選択ができるオーダーメイド製造（Configuration to Order: CTO）方式に拡大する

ようになった<sup>9</sup>。

その時期の趨勢に応じて、大手ブランド企業は付加価値の高いブランド価値、R & Dおよび販売を自社に残し、生産、部品管理、在庫管理、物流管理などの業務を台湾のOEM・ODM企業に任せるようになった。ブランド企業も全体の部品購入コストの低減を図り、過去の多社購入から単一部品企業からまとめて購入する（one-stop shopping）方式を採用するようになった。つまり、「ブランド企業は製造を放棄した」プロセスによって、OEM・ODM生産の企業やEMS企業に新たなビジネスチャンスが訪れたことを意味する。

この時期に鴻海はパソコンの筐体を製造することになった。パソコンの筐体製造を選んだ理由は、1台のデスクトップパソコン筐体製造には50~60の金具が必要であり、世界（北米市場、欧州市場とアジア市場）に筐体を納入する場合、100以上の金具が必要になり、鴻海はパソコン筐体の設計と製造の能力を備えていたため、筐体の製造を選ぶことになった。また、金具の設計の精度および製造の速度は、この部品に参入するときの大きな障壁であった。金具の設計の良し悪しは、部品の品質と出荷のスピードに直接的に影響を与えることになった。デスクトップパソコンの場合、筐体の体積は大きく、重量が重く、そのために、筐体の製造企業は現地市場の近くに組立工場や出荷倉庫を設け、輸送費用を低減する必要がある。そう言う意味では世界の販売拠点を構築する必要があった<sup>10</sup>。

台湾政府は第3国・地域経由の対中投資を容認するようになり、中国の人件費が安いために、鴻海の対中投資も積極的に行われてきた。この時期に約20の工場を建て、パソコン関連の部品を製造していた。鴻海の対中投資は、1988年から香港近隣の深圳への投資がその発端である。1993年から上海附近の昆山などへの投資に拡大するようになった。

それに合わせるために、1988年に香港で鴻海100%の資本金の「Foxconn (Far East) Ltd. (HK)」を設立した。1992年にこの香港の子会社を通じて、広東の深圳に富士康精密組立工場を設立し、パソコンの周辺機器の部品を製造した。1993年に中国で昆山工場を設立し、1995年に富士康電子工業発展（昆山）を設立した。1994年に日本とアメリカでR & Dセンターを設立した。

鴻海の中国での登録企業名は「富士康」であり、中国の富士康集団（グループ）では「鴻富錦」、「富弘精密」、「鴻準」など傘下18の企業の工場が深圳の龍華に設けられていた。鴻海内部の2000年の資料によると、深圳龍華工場の従業員4万人のうち、大学卒以上の学歴が4,000人、専門学校（短大）卒が3,000人、海外の専門家が1,500人、管理技術・販売担当者は約3,000人である。多くの従業員を抱えているために、鴻海は軍事的管理方式を採用している。鴻海の龍華工場の登録名は「鴻富錦精密工場（深圳）有限公司」で、1400ヘクタールの敷地面積に労働者が3万人、世界最大のパソコンの組立基地の1つである。2000年、鴻海の中国からの輸出額は20億ドルで、中国の電子製品の輸出額の4%を占め、その年の売上額は920億台湾元である。

1995年に富弘精密（深圳）を設立し、電子部品を製造していた。同年に富金精密工業（深圳）を設立し、電子部品、パソコンの筐体、ノートパソコン、デジタル通信メディア設備、新型ディスプレイを製造していた。そして、同年に富星精密（昆山）を設立し、光電関連の精密製品、通信デジタル用設備、デジタルメディア設備と部品を製造していた。従業員数は2万人で、面積は深圳の龍華工場に負けない大きさで、「重要部品」の製造基地である。1995年に富頂精密（深圳）を設立し、通信パソコン用部品と計器を製造するようになった。さらに、同年に鴻准精密金具（深圳）と鴻准精密金具（昆山）を設立し、電子部品を製造した。

1997年に富瑞精密（昆山）を設立し、回路基板と回線・ケーブルを製造した。1998年に宏業精密（深圳）を設立し、情報製品の部品を製造した。1998年に康准電子（昆山）を設立し、電子部品および精密金具などを製造した。

1999年に富泰捷精密（深圳）を設立し、パソコンのキーボードおよびパソコン部品を製造した。同年に富泰康科技（深圳）を設立し、ソケットおよび電圧1000ボルト以下の部品を製造した。同年に富泰嘉精密（深圳）を設立し、パソコンの部品を製造した。1999年に鴻富錦精密（深圳）を設立し、精密金具、計器および関連部品を製造した。1999年に宏業精密（昆山）を設立し、パソコンの部品を製造した。同年に富晋精密（山西晋城）と富錦順精密（深圳）を設立し、パソコンの筐体および関連のプレス部品を製造した。また、同年に富弘精密（昆山）を設立し、パソコンの部品を製造した。同年に宏訊電子工業（杭州）を設立し、パソコン、光電、通信関連部品、プリント基板を製造した。この時期には対中国投資が特に盛んに推進されたのである。

中国の商務部（商務省）のデータによると、2002年に鴻海は中国最大の輸出企業で、輸出額は43億8,000ドル（約700億台湾元）である。それが中国の電子製品の輸出額の4%を占め、この年の鴻海の売上額は920億台湾元に達した。そして、2003年11月末のデータによると、鴻富錦は中国の第3位の外資企業であり、投資額は38億6,100万人民币元に達した<sup>11</sup>。

鴻海は海外の大企業からの受注を得るために、1993年にアメリカ・カリフォルニア州のサイプレス（Cypress）でR&Dセンターを設立し、同年、カリフォルニア州のサニーバールでBM Engineering Inc.（Sunnyvale, CA, U.S.）を設立した。1994年にイギリスにFoxconn UK Limiter および同年にアイランドにFoxconn（Ireland）Limiterを設置した。1996年にカリフォルニア州

のフラートンでFoxconn EMS, Inc.（Fullerton, CA, USA）、1997年にハンガリでFoxconn Pecs Kft（Hangry）を設置した。1998年にイギリスでFoxteq UK Limitedを設け、同年にスコットランドのレンフルー（Renfrew）工場、1999年にアメリカ・テキサス州のオースティンでPCE Industry Inc.（Austin, TX）、アイルランドのMullingerでFoxteq（Ireland）Ltd.を設立した。2000年にチェコでFoxconn CZ s.r.o（Pardubic Czech Republic）の工場を設け、光通信事業を行った。これらは顧客の最終消費地付近にコンフィグレーション・センター（物流センター）を設け、中国で製造したベアボーンをこれらの重要部品に搭載し、完成品として出荷する方式を採用したのである。

製品のR&Dと製造能力を向上するために、1996年に日本でR&D拠点のFoxconn Japan Co., Ltd.を設立した。同年、アメリカ・メキシコ州のサンタクララでNew Technology Inc.（Santa Clara, CA, USA）を設立し、顧客に設計と金具の短期間交付のサービスを提供した。同年にシンガポールでPrecision Technology Investments Pte. Ltd.（Singapore）を設立した。1998年にカリフォルニア州のサイプレスでMeArt Technology Inc.（Cypress, CA, USA）を設立し、光機電の部品を製造した。1998年に高周波電磁妨害および放熱試験室を設けた。2000年に台湾晶技に投資し（11%の出資）、挿し込みタイプ（DIP）および表面粘着タイプ（SMD）の石英水晶体製品の製造を行った。

1992～96年に年平均売上額の3%をR&D（研究開発）費に投入し、パソコンのコネクター、筐体の設計能力を強化し、海外ブランド大企業の工場の周辺にハブ設計工場を設けて、顧客に随時サービスを提供するようになり、同時に顧客が必要とする製品を開発することができた。それによって、コネクター、パソコンの筐体などの供給

を顧客のサプライチェーンに組み込み、共同設計を通じて、顧客からの信頼と理解が得られるようになった。

1996年に「パソコン筐体事業群」を設け、北京でパソコン筐体製造センターを設立し、ベアホーンキット (bare bone) の領域に進むようになった。1998年にイギリスのスコットランドに工場を設立した。1999年に組立事業群を設立し、機器丸ごと製造する領域に進むようになった。売上額は500億台湾元を突破し、アメリカとアイルランドで工場を設置するようになった。

1999年に鴻海は競争視訊科技(深圳)を設立し、CD、VCD、DVD、DVD-ROMの光読み取りノズル(ヘッド)、ユニットおよび装置を製造し、その製品の50%を輸出していた。同年に広宇に投資(持ち株は19.87%)し、DVDデバイスを製造した。いままでの考察からわかるのは、中国進出の主な目的は製造基地の構築である。中国以外の諸国の進出の主な目的は、大手ブランド企業から部品や組立の受託生産のためである。

#### IV. ハイテク構築期 (2001～現在)

グローバル時代に入り、IT関連製品は国際的な大競争の荒波を受けて、利潤の低減および製品のライフサイクルの短縮化をもたらした。そのために、海外のブランド企業は製品・部品の外注委託比率を高め、OEM・ODM生産のビジネスが拡大するようになった。それによって、EMS産業の拡大をもたらすようになった。この時期に、台湾のEMS企業と海外のブランド企業との関係は、前工程の部品製造の受託から中工程の量産化の組立・製造に入り、さらに、後工程の販売・配送支援やアフタサービスまで拡大するようになった。つまり、海外のブランド企業は、販売および部品の設計・開発を担当し、残りの部分はEMS企業に委託するようになった。EMS企業はサブ

ライチェーンの管理を通じて、コストと品質の管理および効率性の追求を結合し、納期の短縮を図るようになった。

この時期に鴻海はマザーボード、モデム、バッテリーパッド、液晶パネル、DVDなどパソコンの重要部品を製造するようになった。要するに、これら重要部品の設計・製造の能力、特許を通じての知的財産権の掌握、量産化による製品の単価の低減、資源運営能力およびアフタサービスの提供を行うようになった。

いままで鴻海の最大の工場は主に深圳の龍華に分布していたが、その後には上海の昆山、天津などに工場を設けるようになった。郭の父親の故郷に4000万人民币元を山西省太原、晉城および运城などに橋梁、道路の舗装、水道の舗設、教育、貧困救済などの公益事業を寄付した。同時に、500万ドルを投資し、富晉精密金具有限公司を設立し、親の故郷に3C(パソコン、通信機器、消費性電子機器)産業が定着するように期待していた。

2000年に海外無担保の転換企業債を発行し、3億4500万台湾元の資金を集め、チェコで光通信事業群の工場を設置した。30億台湾元の「光鳳凰計画」を展開し、光通信の領域に進むようになった。2001年に、「富士康(北京)科学技術工業協議書」を締結した。2002年、鴻海は中国・蘇州でコネクター工場を設置し、チェコのパルドゥビツェ(Pardubice)に製造センターを設置するように決めた。

この時に鴻海は3年以内で自動車部品市場に、6年以内に「製造の鴻海」から「ハイテクの鴻海」に転換すると発表した。鴻海グループの世界運営本部とR&D(研究開発)センターを台北に設置し、「台湾でR&D、世界各地で製造、世界で販売」という鴻海企業グループをハイテク企業にする構想を立てている<sup>12</sup>。

2003年以降の鴻海の企業戦略はM&A(合併・買収)を通じて、通信電子、消費電子、自動車電

子の重要技術を獲得していた。そして、情報関連の大企業の製造および組立工場を買収することによって、鴻海は海外ブランド企業のバーチャル工場になり、より密接な関係を構築するようになった。同時に、運営チャネルの拡張によって、鴻海は低コスト製造ができる地域に製造工場を移転するようになった。移転ができない海外拠点は、コンフィグレーション・センター(物流センター)やR&Dセンターに転換すること、あるいは閉鎖することによって、世界の運営地域の連帯がより完璧になり、コスト採算に合うようにした。

具体的に、2003年10月に6千220万ユーロで携帯電話の筐体を製造していたイーモ(Eimo Oyi)を買収し、それによって間接的にノキア(Nokia)の受注を獲得するようになった(ノキアはEimoの大顧客)。同年10月にモトローラのメキシコ工場を1800万ドルで買収し、この工場は携帯電話の組立工場である。買収の目的はモトローラから安定的な受注の確保である。要するに、鴻海は優れた部品の製造能力と組立能力によって、ノキアとモトローラの2大ライバル企業から受注を得ることができた。

鴻海が工場を拡大する場合、完全な複製方式を採用した。つまり、既存の工場の設計、製造工程の流れ配置を完全に新しい工場に複製し、移植していた。具体的に言えば、鴻海のチェコのパルドゥビツェ(Pardubice)工場の製造工程の流れ配置は、中国深圳の龍華工場をモデルにし、コピーしたものである。まず、龍華工場で標準工場のモデルを建て、シミュレーションと録画撮影し、操業が軌道に乗った後、これをチェコの工場に完全にコピーした。そのために、チェコの工場が建てられた後(2002年8月)、僅か4カ月以内で、月産20万台のパソコンの製造を立ち上げることができた。このチェコ工場の前身は軍事用レーダーの製造工場であり、全盛期には5000人の従業員を擁したが、鴻海が買収時にはわずか400人の従業員

員しかなかった。鴻海を買収によって軍事産業から民生用電子への転換を図り、欧州向け製品の製造基地にしている。

2002年に鴻海は群創光電に投資し、液晶(LCD)パネルを製造することで、2003年4月に小寸法液晶の後工程モジュールの量産化を開始した。同年7月、群創光電のパネル工場の建設を開始し、大寸法の後工程モジュールの量産化が始まった。2004年10月にノートパソコン用液晶パネルの量産化が開始された。2004年に鴻海はカラーフィルター製造の展茂光電に投資(持ち株比率2%)した。同年にエイサーとダイムラー・グループの無線通信機器の合弁企業・國碁電子を買収し、鴻海のネット通信の統合能力の強化が実現した。

2004年の鴻海の売上額は、シンガポールのフレクストロニクス・インターナショナル(Flextronics)社を超えて、世界最大のEMS企業に躍進するようになった。

2006年に世界最大のデジタルカメラのOEM企業の普立爾科技(プレミアイメージ・テクノロジー)が加盟し、グループ内の機械・光電の統合が強化された。この年に、富士康国際(FIH)は香港のハンセン(恒生)株価指数の計測の1企業に選出されるという名誉を獲得した。

表1は鴻海グループの4C産業(パソコン、通信機器、消費用電子製品、自動車電子製品)での配置である<sup>13</sup>。この表は2005年時点の製造状態である。パソコンについては、鴻海のコネクター、ケーブル、マザーボード、DVDおよびパソコンの組立、鴻準のラジエーター、ラジエーター・モジュール、筐体およびゲーム機の組立、広宇のコネクター、プレイステーション2(PS2、現在はPS3)の回路基板およびヘッドホン、首利のバッテリーパッド、パソコンの筐体およびベアボーン、英群のキーボード、マウスおよびナビゲーション、麗台と撼訊のモデム、群創光電のパソコン用液晶パネルなどである。通信機器については、正蔵の

表1 鴻海グループの4C産業の配置一覧

産業別	部品	モジュール	組立	
			ODM	OEM
パソコン				
①鴻海	コネクター、ケーブル	マザーボード、DVD	○	○(パソコン)
②鴻準		ラジエーター、ラジエーター・モジュールマグネシウム合金筐体		○(ゲーム機)
③広宇		コネクター、PS2 回路基板、Bluetooth ーツ・イヤホンなど		○
④首利		バッテリーパック、パソコン筐体ベアボーン		○
⑤英群		キーボード、マウス、ナビゲーション		○
⑥麗台		モデム		○
⑦撼訊		モデム		○
⑧群創		パソコン用液晶パネル		○
⑨志合				○
通信機器				
①正崴	通信コネクター、ケーブル	携帯電話用バッテリー、電流管理モジュール	○	○
②鴻勝		軟性印刷回路基板		
③富士康			○	○
④建漢		無線モジュール		
消費性電子製品				
①鴻海		Xbox 用コネクターとレバー iPod		○ (PS2)
②正崴				○
③鴻準			○	○
自動車電子機器				
①安泰電業		車用ケーブル		
その他				
①沛鑫		半導体機台		

(出所) 伍忠賢『鴻海藍圖：鴻海集團沒寫出來的功夫』五南圖書、2006年。

通信用コネクター、ケーブル、携帯電話用バッテリーおよび電流管理モジュール、鴻勝のソフト印刷回路基板、富士康のOEM・ODM、建漢の無線モジュールである。消費性電子機器については、鴻海のPS2（ソニー・コンピュータエンタテインメント）、正崴のXboxのコネクターとレバー（マイクロソフト）、ipod（アップル）などである。

自動車用電子機器については、安泰電業の車用ケーブルである。そのほかに、沛鑫の半導体用の機台がある。

2009年にはドイツ最大流通のメトロ・グループ（METRO Group）が中国市場に参入し、鴻海と戦略的パートナーシップを締結した。そして、2012年秋にメトロとの合併の家電量販チェーン・万得

城の第1号店を上海にオープンし、今後、中国で100店舗以上の展開を図っている。

鴻海傘下の群創光電と奇美グループと同盟関係を締結し、世界における競争力の向上を図った。同時に、2009～2010年に、ソニーのメキシコとスロバキアの液晶テレビ工場を買収し、ソニーとのビジネス提携により、欧米市場の液晶テレビ産業のサプライチェーンの構築を図った。

2011年に鴻海傘下の群創光電は世界第4位(台湾第2位)の奇美電子と合併し、業界を驚かせた。奇美電子は奇美実業の許文龍社長が所有する液晶(TFT-LED)パネルの製造企業である。この合併後の存続企業名は奇美電子(2012年12月に群創光電に企業名を変更)であるが、所有者は郭に移行するようになった。この合併後に奇美電子の売上額は友達光電のその額を凌駕し、世界第3位に躍進するようになった。これも2012年3月の鴻海がシャープの筆頭株主になる前奏曲であった。

2011年に制定された鴻海の5カ年計画によると、2012年から16年まで、年間売上額は15%の増加の計画であり、売上額3兆台湾元で計算すると、年間売上額は4500億台湾元の増加になる。つまり、1年間に台湾積体回路製造(TSMC)1社分の売上額の増加を意味している。パソコンの爆発的成長の時代が終焉を迎え、ノートパソコン価格の低下によって、利潤の減少をもたらした。

いままで鴻海の中国での「製造の大本営」は深圳の龍華工場であり、労働者の獲得や従業員の自殺事件以降、「西移」(中国大陸の内陸部への移転)が始まるようになった。それは従業員が中国の内陸部の故郷から深圳に単身赴任によるストレスに対する配慮によるものである。

ソニー、任天堂のOEM製品は消費電子製品事業群(CCPBG)の山東煙台に設け、富士康国際(FIH)の携帯電話代理製造はノキア、モトローラ

などの顧客の近くの北京から天津の間の「廊坊工場区」に設け、金具製造の鴻超準事業群(SHZBG)は親の故郷の山西晉城に設けた。過去の深圳龍華への一極集中から、中国各地に分散する方式に大きく変化するようになった<sup>14</sup>。

## おわりに

いままで鴻海の「勝利の方程式」とは、海外のブランド企業から製造を受託し、中国で安価な労働力の大量投入による規模の経済効果が発揮できる方式(薄利多売)によって達成したものである。しかし近年、中国の賃金高騰によって、旧来の勝利の方程式では次第に限界を迎えるようになった。郭はシャープなどとの協力によって旧来の低付加価値から高付加価値へのシフトを試みている。

近年、液晶パネルの価格低迷によって買収した奇美電子は赤字経営の状態、経営参加のシャープも赤字経営の状態である。鴻海はシャープの株式を1株当たり550円で取得を予定したが、2012年6月22日の株価の終値は425円と予定額より約23%も下落し、約64億台湾元(約171億円)の含み損が発生している計算になっている。その後、一時はシャープ株1株当たり140円台まで下げ、鴻海は取得価格の引き下げを求めたが、鴻海による出資が期限の今年の3月26日まで実施されなかった。鴻海が求める中小型液晶の技術供与などにシャープは消極的であり、鴻海からの出資の実現は難しい情勢である。そのほかに、米・アップル社の最新スマートフォン「iPhone5」の販売の伸び悩み、生産調整に入り、鴻海に余力がなくなりつつある。果たしてこれからの戦略移行は上手くいくのか、郭の次の一手とはどんなものなのか、氏の強靱な手腕に期待したい。

<sup>1</sup> 大西康之「危機の電子立国 シャープの決断」『日本経済新聞』2012年5月21日～26日付および3月26～28日の日本経済新聞

など各新聞社の報道。

- <sup>2</sup> 近藤伸二『アジア実力派企業のカリスマ創業者』中央公論新社、2012年。
- <sup>3</sup> 池田光史、他「特集 家電敗戦—失敗の本質」『週刊 ダイヤモンド』第100巻23号、2012年6月9日。
- <sup>4</sup> 張戍誼・張殿文「奮力飛行的孤雁」(張戍誼・張殿文・盧智芳など『三千億傳奇 郭台銘的鴻海帝國』天下雜誌、2002年に収録)。
- <sup>5</sup> 陳芄婷「鴻海企業經營策略之研究」交通大學管理學院科技管理研究所碩士論文、2002年。許龍君『台灣世界級企業家領導風範』智庫股份、2004年。
- <sup>6</sup> 陳芄婷「主動培養核心能力以創造競爭優勢：以鴻海企業為實証案例」交通大學管理學院科技管理研究所博士論文、2006年。
- <sup>7</sup> 張殿文、前掲書、2005年、104ページ。
- <sup>8</sup> 徐明天『郭台銘與富士康』、泰電電業(馥林文化)、2008年。
- <sup>9</sup> 川上氏は製品のコモディティ化によって標準的な製品設計(ドミナント・デザイン)が確立したと指摘した。川上桃子『圧縮された産業発展—台湾ノートパソコン企業の成長メカニズム』名古屋大学出版会、2012年、122~126ページ、143~145ページ。
- <sup>10</sup> 王樵一『創兆奇蹟的郭台銘』超邁文化國際、2007年。
- <sup>11</sup> 伍忠賢『億到兆的管理—郭台銘7M鐵則』五南圖書出版、2006年。張殿文、前掲書、2005年、118ページ。
- <sup>12</sup> 余文郎「紅海、藍海—從鴻海與廣達的競合關係探討 IT 產業的藍海世界」台灣科技大學管理研究所碩士論文、2006年。林宏文・高玉齊・林易萱「郭台銘苦戰」『今周刊』第622期、2008年11月。
- <sup>13</sup> 伍忠賢『鴻海藍圖』五南圖書出版、2006年、29~30ページ。
- <sup>14</sup> 賴筱凡・林宏文、「郭台銘沒說出口的秘密」『今周刊』第756期、2011年6月、2011年6月。

## 「日台ビジネス・アライアンス 現状と課題 相互補完性と日本経済活性化」

財団法人) 資訊工業推進会 顧問 海老原 信義

はじめに——感激と自省 (WBC 日台戦)

3月8日(金) その日はたまたま台湾に長期出張する友人の「壮行会」を予定しておりました。どうせなら友人の台湾在住中の話題づくりにと、スポーツ・BARに参集、観戦となりました。メンバーは4名、ただ誰も野球には興味が無く、筆者に至ってはこの数年野球TV観戦もした事はありません。

4名とも試合前は、「まあ 日本が勝つだろう」と根拠の無い楽観。

ところが試合が始まるや、皆さまも御存知の緊迫・白熱した大熱戦。試合中は友人の台湾での受け入れ先、工業技術院の責任者の方とリアル・タイムにメール交信。両国(にわかサポーター4名)とも一球・一打に悲喜交々。

試合は日本の劇的な逆転劇にて終了しましたが、試合後両軍の死力を尽くした戦いに満足感と清涼感に浸りました。

両国の野球界、選手の皆さんの長い交流、切磋琢磨があってこそこのような名勝負になったと思います。

ひるがえって筆者が係わっている、「日台経済連携」筆者は、選手の皆さんの様に真剣に取り組んでいるのか自省させられました。日台産業界共に、「世界一」を目指し、真剣に「競争、共創」していかなければと考えさせられました。

### 1. 日台経済連携の現状——堅実に拡大

最近の中国情勢変化、ASEAN諸国の飛躍的な経済成長、および台湾経済部傘下で組織化されたTJPO(TAIWAN—JAPAN COLLABORATION PROMOTION OFFICE)の日本政府機関、企業への地道な活動もあり、経済連携先としての「台湾」のメリットも理解を深め、連携は堅実に拡大しております。

すなわち、台湾の投資先、連携先としてのメリットとしては、

- ①日台民間投資協定締結による、安定且つ秩序ある投資環境。投資インセンティブ。
- ②ECFA(中国との貿易協定)、台湾企業の中国

内サプライ・チェーン網活用による中国進出リスクの低減。

- ③経済特区 日本企業向け工業団地、中小・ベンチャー企業向けインキュベーション施設の利用。
- ④知的財産権、著作権への法的な保護。
- ⑤中華圏で最も親日的な国家。等あげられます。

又日本経済新聞 2月5日付け「アジア ビジネス マップ——消えるフロンティア 進出戦略、事業コスト見極め」に大変興味深い記事が掲載されておりました。アジア諸国で勤務した御経験のある方ならば、直観的に理解されている事が数字となり示されておりました。

アジア各都市の・工場労働者の人件費・オフィス賃料・電力料金・牛乳価格・犯罪指数の5分野を選び、バンコクを基準に(20ポイント、トータル100ポイント)各都市の事業コストの比較がされております。

台北は北京(170ポイント)より10ポイント低い(安価)160ポイント、上海は台北より10ポイント低い150ポイント。要は台北は北京 上海と比較し、事業コストでは殆ど差が無いとされています。

台北へのコメントとして「人件費は高いが、他都市の急激なコスト増で相対的な割安感も出てきた。」とあります。

基準となるバンコクは100ポイント、武漢も同様の100ポイント。ジャカルタ95、最も安価な地域はチェンナイ70ポイント。最も事業コストが高いのは香港260ポイント。

当記事の結論は、アジアにおいては、バンコクに比較し極端にコストが低い都市は無い。「企業は事業内容にふさわしい進出先をこれまで以上に慎重に探していく必要があります。」としております。

さて日経がコストの比較基準とした5分野に、・インフラ供給の安定度(停電件数)・道路、鉄道、港湾、税関など物流基盤、・ストライキ発生リスク・撤退リスク・駐在員の安全、安心等加えると「トータルな事業コスト」では台湾は更に優位になるのではと考えております。

台湾製造業の経営者もこの点は認識しつつあり、台湾への回帰が始まっております。

☆台湾政府の投資インセンティブ、また投資先としての事業コスト・中国・ASEAN諸国への足がかりとしての優位性は日本の産業界にて理解され、日台経済連携は堅実に拡大しております。下記に幾つか具体例で御説明させていただきます。

・業種の拡大:従来はエレクトロニクス関連が多かったが映画・ゲーム等ソフトコンテンツ産業、大型商業施設、環境開発産業(リサイクル、無害化処理技術)、税務・会計・コンサルサービスと連携の業種が広がっております。またエレクトロニクス産業も、スマート・シティ、センサーネットワークを利用した災害予知、減災システム、車載通信とすそ野を広げております。その他にも食品(日本食 ラーメン)、ファッション、コンビニ業界は、大変な勢いで台湾に進出しております。

環境開発産業については、台湾国民の環境意識の向上もあり台湾各市政府(新北市 高雄市他)の環境管理の責任者が、環境改善先進都市である北九州市、神戸市、横浜市を訪問し生活廃棄物の削減施策、産業廃棄物の回収、リサイクル、無害化技術について積極的に学んでおります。

日台両国市政府にとり、廃棄物処理場の建設等にあたり地域住民への説明・合意を得ることに大変苦慮しており、双方の意見交換は大変貴重なものでありました。

・業態の拡大:従来は大手企業中心の連携から(目立つのでそう見えますが 実はしっかりした中小企業は、かなり以前から台湾を活用。)中堅・中小ベンチャー企業と幅を広げております。

特に 独立行政法人)中小企業基盤整備機構(以下 SMRJ)と TJPO の連携により、日本の優秀な一経営革新に真摯に取り組んでいる、台湾進出を希望している一企業へのアジア市場進出支援がスタートしております。

日本の中小企業へは、「開発・生産は日本で行って下さい。販売・物流・現地仕様への対応等」でお手伝いさせていただきますと明確に述べております。台湾政府、TJPO は日本の雇用問題も理解し、又優良な中小企業の保有している技術はそうそう簡単に移転出来ない事も理解しております。

日本の中小企業の3%しか海外ビジネスに進出していない現状を考えると（実態は製品・装置の部品他として組み込まれ輸出されていると推察）今後日本の中小企業成長に貢献できるのではと考えております。

中小企業にとって、言葉の壁、商習慣の壁は大きく、カタログ・仕様書作りから売掛金の回収まで大変な困難が伴います。アジアで日本以外に約束通り（支払い条件に従って）お金を払う国はあまりありません。筆者は中小企業の経営者には、前途金を受け取ってから出荷しなさいと伝えております。信頼できる販売パートナーがあればこの不安も払拭されます。

また SMRJ 主催の中小企業「総合展」が東京・大阪で開催され、昨年10月の東京での「総合展」に TJPO もブースを頂き、投資インセンティブ等の御説明、アピールをさせて頂きました。（当展示会は日本の中小企業のビジネスマッチング、及び海外—中国・韓国・タイ・ベトナム等アジア諸国、中南米諸国からも出展。各国政府は誘致活動、企業は製品紹介 日本でのパートナー探しを行っております。参加者4万8千人）

昨年の総合展の際に、台湾) TJPO から派遣された2名の説明員が、SMRJ 支援の RIN CROSSING の展示商品を見て大感激。「海老原さん この商品台湾に紹介して！ RIN CROSSING と連携させて！」との事。

RIN CROSSING は「地域資源商品」（各地の伝統工芸技術、食品加工技術）を基に、そのままの商品スタイル、少しモダンな味付けをした商品、切り子硝子、陶器、漆、繊維、木材加工品等の「匠・職人」企業への支援をしております。

こうして昨年末より SMRJ RIN CROSSING との連携も始まり、出店計画等検討がされております。

この検討過程で筆者は全くの門外漢（伝統工芸台湾で受け入れられるか）の為、多くの台湾人から意見を聞きました。結果は「本当に好きなんだ。」であります。特に台湾の若い方々の日本の伝統文化への思い入れ、「おもてなし」等のサービスへのあこがれ、深い敬意に認識を改めました。

さて以上は、日台経済連携の拡大（伝統工芸品まで）成功事例で将来も安泰？であるかのようではありますが、将来の更なる発展・深化を考えた際、懸念・課題もあります。以下日台連携の打ち合わせ現場で感じた・考えた課題について記したいと考えます。

（筆者は日本エレクトロニクス・メーカーにて34年 その後台湾 OEM・電子部品メーカーに3年で現職に至り、TJPO の日台連携を支援しております。この為エレクトロニクス業界にかたよった見解になってしまう事をお許しください。）

## 2. 課題

・技術開発力（日本側から見ると技術格差）：最大の課題でありますので重点的に記させていただきます。

最近、連携案件として増えてきた開発分担。日本企業は開発リソースに限界があるので、アジア新興国向け製品については、台湾との開発分担を行いたいとの意向。基本技術は日本側を基にし、コスト低減の為、機能を絞った製品、現地の規制（電気・安全等）に合致させる製品は台湾開発・製造。販売は日本企業のブランド。

このような開発分担の現場で起こりやすいのが、日本側「当社の基本技術を理解していない。」台湾側困惑。

台湾側「基本技術の全てを開示していない。せいぜい機能と接続方法ぐらい。」（日本側「当然ブ

ラック・ボックス化」してある為、開示しない。) 日本側「PCにしろスマホにしろあんなに高性能の製品を作っているのに～、技術の出し惜しみか? 本当にないのか?」このように双方、意見のGAPが生じます。

この開発現場での混乱の原因は、両国の産業発展の基本的な相違から生じていると考えております。

また、昨年からのFOXCONによるSHARPへの出資、TSMCによる日本半導体メーカーの工場への出資と台湾メーカーの動向が大きく報道されていることも一因ではありますが、この両社はビジネス面での成功であり、技術面で優位に立った訳ではありません。

日本企業は、自社開発・技術=生産で成長してきましたが、台湾は開発・技術は他社から、台湾は生産のみであります。いわゆる生産受託(OEM・EMS)であります。

それでは台湾側 生産=日本側 生産と同義か? これも意味が全く違います。顧客は、商品設計の仕様、製造仕様、品質管理仕様 時には(多くの場合)材料、製造設備、検査機器まで指定。台湾企業はこれらの仕様に準じ、如何に効率よく生産するかが最大の経営課題であります。この為、生産に使用される材料・部品(半導体・電子部品)についてその機能は理解しておりますが、その材料・部品そのものを開発する事は出来ません。

製造装置についても同様であります。(台湾のエレクトロニクス・メーカーが日本の材料・部品・装置メーカーの良い顧客であるゆえんであります。)

以上から台湾エレクトロニクスメーカーは、極言しますと、開発投資無し、マーケティング無し

(営業人員も極端に少なく)、製造者責任無し、特許紛争の可能性無し、中国の安かった人件費を活用し利益を挙げてきました。

最近では、自社開発・ブランドの会社も出てきました。開発投資負担、営業・SCM投資負担、ライセンス紛争等乗り越え成長可能か見守りたいと考えております。

筆者の私見は、台湾企業・事業部門の技術レベルを意味しており、個人のレベルでは全く異なります。台湾の若い研究者、エンジニアは世界の最先端の研究施設・大学・企業等で開発に勤しんであります。台湾政府の大きな悩みは頭脳流失であります。彼らは研究に最適な環境(賃金含め)を求め易々と国境を超えていきます。

世界各地で台湾人研究者が、バイオエレクトロニクス、先端医療、ナノテク等先端素材の研究に従事しております。この点は見逃してはならないと考えます。米国のIT不況の際、多くの台湾人エンジニアが帰国し、現在の成長を支えました。一人ひとりの頭脳の中では、要素技術・基礎技術は理解されてはいますが、企業としては「早期に規模の利益」を求めざるを得ず、現在のビジネス・モデルに至ったと理解しております。

☆日本企業が今後共同開発、開発分担を行う際、お互いに「技術」と呼んでいるものが本質的に違う事を再認識頂き、台湾側の技術理解度を事前に充分確認される事をお勧めします。また今後共アジア市場での良きパートナーとして育成する際には、ある程度御社の固有技術を開示・教育をする必要があると考えます。

その際には、是非何故このような方式を採用したか・何故このような回路にしたか・何故このようなソフトの構成なのか等、目的も含め御説明頂きたいと考えます。次の開発時に必ず役に立ちます。

余談ではありますが、台湾 OEM・EMS の最大顧客は米国です。何故米国企業は台湾企業に生産委託するのでしょうか？ 筆者が台湾企業に勤務してたおり、米国大手 IT メーカーの幹部（65 歳、台湾 OEM の歴史をよく御存知の方）に聞いたことがあります。答えは「当社は一時 中国に自社工場を保有・生産していたが、言葉の壁もあり（指示が正確に伝わらない、従業員教育が出来ない）生産が安定しない。又 法令・税制頻繁に変わり折衝・管理が煩雑。この為中国生産から撤退し以前から取引のあった台湾メーカーにお願いした。」

要は無駄な？ 努力はしないで 諦めよく台湾企業に委託した訳であります。日本企業との生産戦略の比較上、大変参考となりました。

#### ・台湾側の技術開発の取り組み：差別化技術の開発

昨年より、台湾の産業界では、「四大惨業」とよばれている事業があります。つい最近までは先端商品であった、「DRAM」「LED」「LCD」「ソーラーパネル」であります。参入メーカーが多すぎたというきらいもありますが、製品ライフタイムの短縮、中国メーカーとの競合により大変な苦境に陥っております。

この問題もあり、台湾政府、企業経営者も自主・独自技術保有の必要性は良く理解しており、

・中国での人件費 UP・利益率低下への対応⇒FA 導入等生産の効率化。

・製品ライフタイムの短縮⇒あっという間に「COMMODITY HELL」に陥る⇒差別化技術

・中国企業（市政府支援）の市場を無視した、大量生産

・安値攻勢⇒差別化技術の取得が必須と認識はしております。先程の「四大惨業」も現在 新しい技術開発に取り組んでおり（一部は日本企業と）再生してくるのでは考えております。

台湾政府も産業の高度化戦略として、2008 年「六大新興産業」を策定バイオテクノロジー、クリーン・エネルギー産業、先進医療他、2010 年「四大新興スマート産業」としてスマート・グリーン建設、クラウド・コンピューティング、EV-CAR 他を指定、育成を図っております。今後成果が顕在化してくる事を期待はしております。この領域での台湾の公的開発機関、大学の一層の奮起が必要と感じております。

企業経営者も自社固有技術の開発、ベンチャー投資・買収等による技術の取得を図っております。今後は更に中長期的な視野で継続した開発投資を心がけて頂きたいと考えます。

エレクトロニクス業界以外でも、製品ライフサイクルの短縮、中国他 ASEAN 企業との競争が熾烈となり、従来の日本に「一步遅れて参入」戦略は通じなくなりつつあります。

最近台湾経営者から、「東レとユニクロのような関係は素晴らしい。台湾もあのビジネスモデルを見習わなければ」と言っておりました。彼は今後材料発の商品・サービスの差別化が更に拡大すると推察しておりました。

その際には、日本の産業界の持っている技術力で新しいイノベーションが生まれ日本企業が成長すると考えておりました。

さてこのように書いてしまいますと、日台の開発連携は相当困難さが伴うお考えになってしまうでしょうが、一相当な工夫・努力が必要ではありますが一開発された「技術をお金に換える」のは台湾企業は得意であります。

日本の家電メーカー、半導体メーカーの苦境に比べ、なんとなく台湾は上手くやっているように感じますが、台湾企業も相当な努力を払っております。以下に台湾企業の努力の成果と、日本企業

との相互補完性について記します。

### 3. 相互補完性の追求

・マーケティング・センス・コミュニケーション能力

先程米国企業が何故台湾メーカーに生産委託した経緯を記しましたが、その背景には70年代、80年代に優秀な台湾人エンジニアが米国に渡り（当時台湾では職が無かった）、大学・企業で経験を積み人脈等を深めたことも大きな要因であります。彼ら・彼女らが台湾に戻り、企業経営者・事業責任者となり米国企業との折衝に当たりました。現在も両国TOP同士の信頼感は強く、また台湾側も細心の注意を払って米国企業TOPと接しております。真剣に彼らの話・要望を聞き、理解し、生産対応を素早く整えるように心掛けております。

（OEM・EMS会社は顧客と一蓮托生である為当然ではありますが）

台湾企業の皆さん（TOPを含め）コミュニケーション能力（英語力）、折衝力は日本人をはるかにしのぎます。

当たり前ではありますが北京語も話せます。生産拠点は中国ですので、中国政府、市政府との折衝を通し、中国の生の現状をよく理解しております。同時に中国のマーケット動向も常に把握しており、クローン・コピー製品の価格帯、自社製品（米国ブランド品）との価格差も常時チェックしております。

顧客である米国企業の開発方針も理解しているので、時にはマーケット情報を提供しております。

既に大手OEM・EMS企業は中国内に米国企業製品の販売網を持っています。（米国企業は、開発・ブランド戦略に専念、生産・販売網は中国・台湾では台湾企業に委託しつつあります。）

日本企業の皆さんと、台湾企業が価格条件で折衝が難航する事があります。日本側はもっと高く売れるのでは！台湾側は3割時に5割安価で無ければ顧客に受け入れられない！この差で有ります。ただ残念ながら現実には台湾企業の指摘通りとなります。

日本企業もアジア市場で勝ち抜く為には、彼らのマーケティング情報から、自社製品の機能・デザインの絞り込みを行い、コスト競争力・ブランド力を更に付ける必要があります。

#### ・量産手法

生産技術も無いのに量産手法とは？と驚かれるでしょうが、不良が出ない・出にくい生産手法（ライン設計）を工夫して構築しております。同時に、不良が見えない（機能には問題無く、外観上だけの不良）製品設計を顧客に要求し、生産効率を上げております。（日本企業も工夫はされていると思いますが、徹底しております）

#### ・部材の内部生産

意外な側面ではありますが、自社で使う一部の材料、部品を内作しております。中国製品の品質がばらつく為、自社で生産する事により、品質管理の一貫性が図れ、コストダウンが可能となります。電線も銅のインゴットから購入製造、成形用樹脂原料、金型・冶工具、簡易な製造設備、コネクタ等自社生産し、外部にも販売しております。また、顧客製品に戦略的な差別化を施す部品（高精細液晶等）については、企業買収・出資等により、自社部品化し、顧客要求に応え、安定調達を図ります。

中国で生産している日本企業もこれらの量産手法は大変参考になりますし、中国の台湾企業からの材料・部品等の調達を検討されたと考えます。

#### ・システム化による効率UP

米国顧客からの要請もあり、顧客サービスの一環としてリアルタイムに生産進捗情報を提供して

おります。生産指示から、進捗、計画・予算と実績分析のシステムは進んでおり、人員も非常に少なく効率的であります。

以上御説明のように台湾企業もマーケティング・顧客対応・生産効率化に励み、独自の KNOW - HOW を蓄積しております。

☆日本企業の地道な開発努力（素材 生産設備商品に至るまで）と台湾のマーケット力・交渉力、中国での生産 KNOW - HOW が上手く繋がると、日本企業の成長に更に貢献できるのではと考えております。

極端な言い方をすると、新興国向けは台湾企業・日本との共同マーケティング・商品企画、日本・台湾での開発・試作、台湾企業への生産委託。販売も台湾企業の SCM を利用。

先進国向けは日本での製品企画、開発、試作、製造、販売。この組み合わせが極端ですが最も適格的ではないかと考えます。

個別企業様の業態・製品特性から色々な制限もあり、選択肢もあると考えます。以上はあくまでも筆者のエレクトロニクス産業、及び現在の日台経済連携の現場という狭い分野で経験し、考えた私見であります。

皆さまの海外、アジア進出検討の一助となれば幸いです。

#### 4. 底流の変化—若い台湾人の意識変化

最後に台湾の若手エンジニア・ビジネスマンとの交流から感じた事を—底流・潮流の変化—を記します。

前段にて、台湾の若い方の日本の伝統文化（茶道・生け花まで）、伝統工芸品、おもてなしへの尊敬・あこがれを書きましたが、その心の底流には

何があるのか？

彼ら、彼女らの心の底流に、経済成長・市場経済・競争等我々世代が当たり前としてきた事に対する「諦観」がある様な気がします。生活の為働く訳ですが、何か今までの台湾人ビジネスマンと違うのです。

国が豊かになり、余裕が出てきた証とするのは簡単ですが、もっと複雑で深いような気がします。

彼らは、リーマン・ショックを経験し、「売りぬく資本主義」が産み出す悲惨さを知りました。米国で働いていた友人がリストラされたであります。また上海の経済成長・高層ビル乱立の「陰」も良く見ております。

中国の大気汚染、公害問題、食の安全問題には呆れかえっております。

更には日本の原発問題の根の深さも知り、現状のままで良いのか？我々（60歳代）以上に深く考えております。

この為、数百年変わらずに続く日本の芸術・工芸、自然を破壊せずに人を楽しませる・心を豊かにさせる「何か」にあこがれているのではと推察します。（ある台湾人の友人からのアドバイスですが）

彼らが心底興味を持つのは、伝統・自然と調和した地域・都市、商品、サービスだそうです。

（最近台北等都市部で日本統治時代の古い民家を改修し、喫茶店・レストランとして利用するのが流行っているとか）

環境保全意識も高く、再生可能エネルギー、有機栽培での農業、水質浄化システム等に大変強い興味をもっているそうです。これらの領域での日台連携も興味深いものがあります。

この底流の変化は他のアジア諸国も同じか？筆

者は分かりませんが、ある種の従来型経済成長への「諦観」はどの国の「若い人々」にはあるのではと考えます。

国家も企業もこの底流の変化を見過ぐすと大きな間違いをおかしそうな感があります。

自然、地域、伝統、家族、友人との「共生・調和」を「競争」する（だから旧人類は駄目と言われそうですが）時代がくるのか～。などと考えて

おります。

「道徳なき経済は犯罪である。経済なき道徳は寢言である」二宮尊徳

この言葉を最後に当原稿を閉めさせて頂きます。

以上



## 台湾ランニング事情 第3回 2012 台北マラソン

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員兼助理教授）

亜熱帯の台北でも11月以降は涼しくなり、本格的なロードレースシーズンになる。台湾のロードレースの中でも最も認知され、規模の大きい大会は毎年12月中旬に台北市内で開催される「台北マラソン」である。

同大会には例年「10万人以上」の参加があり、沿道の応援者も多い大会であるだけでなく、数年前からは海外から招待選手を招く賞金レースにもなっている。小生にとっても、昨年の同大会で初のフルマラソン体験となった今レースを報告する。

### 1. 台北マラソンの歴史沿革

毎年12月に台北で開催されるマラソン大会はスポンサーである富邦金控（Fubon Financial Holding Co.）の企業名を冠した「富邦台北マラソン」と呼称される。

同大会の主催者は台北市政府と中華民国ロードレース協会（中華民国路跑協会）、指導単位はスポーツ行政を担当する行政院体育委員会の名前が連ねられている。大会会長には郝龍斌台北市長が就くなど官民協力のもとに実施されているレースである。

同大会は台湾におけるロードレースで最も規模が大きく、知名度が高いものであるが、歴史を調べて見るとその変遷もまた興味深い。同マラソン大会は、未だに戒厳令が施行されていた1986年に「台北国際マラソン」として始まったが、当時は理由は不明なるもフルマラソンではなく12キロ、23.5キロで実施されていた。その後、台北市内の地下鉄工事のため1990年から2000年の間は中断されたが、地下鉄工事の影響を受けない高速道路を利用した「国道マラソン」が1996年から開催され、右に「台北マラソン」の名称は引き継がれていた。（2001年から台北マラソンが復活したことにより、「国道マラソン」は一時中止になった



1 スタート前の様子



2 ゴール付近の様子

が、2002年以降は、毎年3月に台北市内の高速道路を利用した「台北国道マラソン」、12月には一部市街地を走る「台北国際マラソン」を実施することとなり現在に至っている。

2004年に外資のINGグループが正式なスポンサーとなることで大会の名称も「ING台北国際マラソン」となった。2008年にはING社が台湾での経営権を台湾大手金融機関の富邦金控に合併されたのに伴い、2009年以降の大会では「富邦マラソン」の名が定着するようになった。そのため台湾では通常「20〇〇富邦マラソン」と呼ばれている。また、開催回数に関しては、スポンサー名を冠するようになった2004年大会を第一回として、本年の大会が第9回目の大会と呼称されることが多い。

9回の歴史を紐解くと、前回紹介した陽明山ロードレースと同様に、当時台北市長の馬英九総統が2006年大会の9K部門に参加し、54分59秒で完走している記録も確認できる。(http://www.sportsnet.org.tw/score\_ing9.php)

## 2. 大会概要

2012年12月16日に開催された「2012富邦台北マラソン」の概要を、参加者に送付されたパンフレットを参考に紹介する。「10万人参加の大会」と謳っているものの、フルマラソン、ハーフマラソン、9キロの有料種目の参加者数は、それぞれ7千、1万8千、1万8千であり、最大で合計4万3千人である。また小学生を対象にした「児童組」(600)、警察消防関係者を対象にした「警消組」(1200)を含めても合計では4万5千人に満

たないが、右種目以外にレース当日に無料で参加できる市政府周辺の周回3キロコースを走る(歩く)「Fun Run」がある。右レースは、先着1万人が記念品をもらえるとの紹介があった。このFun Runには例年、5万人以上の参加があると言われている。

表1は「2012富邦台北マラソン」のレース種目の種類と参加費用の概要である。参加費用には、フルマラソンの場合、ランニングシャツ、バスタオル、完走メダル(完走者のみ)、スポーツドリンク、コンビニ弁当などがつき、レース後に計測チップを返却すると100元戻るシステムになっている。台北マラソンは市民参加型レースである一方、「国際マラソン」という側面を強調するように海外からエリートアスリートの選手を招く「賞金レース」でもある。同パンフレットには12名の招待選手が顔写真付で紹介されているが、残念ながら日本からのエリートアスリートの参加者の名前は見られなかった。

表2はフルマラソン上位者が獲得できる賞金金



3 ゴール付近の様子

表1 レース種目の概要及び参加費用

種目	42キロ	21キロ	9キロ	児童(2K)	警察消防
参加費用	1000元	800元	400元	無料	無料
時間制限	5時間30分	3時間30分	90分	30分	90分
参加人数	7000	18000	18000	1200	600
開始時刻	0700	0730		0930	0730

表2 マラソン上位入賞獲得賞金一覧

1位	120万台湾元 (大会記録は200万元)	6位	5万台湾元
2位	50万台湾元	7位	4万台湾元
3位	30万台湾元	8位	3万台湾元
4位	10万台湾元	9位	2万台湾元
5位	7万5千台湾元	10位	1万台湾元

表3 台北国際マラソン過去6年の優勝タイム

	男子優勝タイム	女子優勝タイム
2005	2時間11分54秒	2時間33分39秒
2006	2時間11分5秒	2時間30分56秒
2007	2時間17分9秒	2時間33分1秒
2008	2時間15分37秒	2時間30分44秒
2009	2時間15分57秒	2時間30分5秒
2010	2時間14分4秒	2時間30分37秒
2011	2時間10分24秒 (大会記録)	2時間27分36秒 (大会記録)
2012	2時間15分27秒	2時間30分19秒



4 ゴール付近の様子

額一覧である。世界最高記録樹立時には100万ドルという超高額報酬のあるマラソン大会と比べると、見劣りするが、プロランナーとしては、参加を考慮できる大会のはずである。

例年成績上位者は海外の招待選手に独占されるため、同大会では台湾人上位枠も設けられており、「台湾人アスリートのマラソンへの挑戦を鼓舞するため」に台湾人の男女トップには、20万元の賞金が授与されると記されている。また、ハーフマラソンの優勝者には5万元、9キロレースの勝者にも2万元が授与されると紹介している。

表3は、主催者の中華民国ロードレース協会のホームページで確認できる2005年以降の男女別の優勝タイムである。2011年のレースでは、男子が2時間10分台、女子も今大会で初めて30分の壁を破る27分台の大会新記録を更新し、勝者は200万元の賞金を獲得している。

今大会のパンフレットに紹介された国際エリート選手リストには、男子7名（ケニア6、エチオピア1）、女子5名（全てケニア）が顔写真付で紹介され（残念ながら筆者が知っている選手はいなかった）、最高記録は男子が2時間7分台2名、8分台2名、9分台1名、10分台2名。女子は21分台を筆頭に6人26分以内のベスト記録という「豪華メンバー」が名を連ねていた。

また走る実際のコースは、「台北マラソン」とは言いながらも、交通規制等の問題もあることから、市街地を走るのは、スタート地点の101ビルを見上げられる市政府から市内でも指折りの目抜き通りの仁愛路から中山北路の約8キロの後は、基隆河沿いの路を約30キロ走り、最後の約5キロだけ市街地を走るコースとなっている。

### 3. レース結果と雑感

新聞報道では、4万5千人のレース組、8万人以上の Fun Run 参加者で合計 12 万人以上が参加したと報じられた。<sup>1</sup>TV ニュースや新聞の写真で見る限りは、対外的に宣伝してきた「10 万人規模のマラソン」という約束は守られたようであった。

レースはエリート組と一般参加者を区別するためエリート選手だけ定刻の 3 分前の 6 時 57 分に号砲。一般参加者は 3 分遅れの 7 時にスタート。優勝は、男子はケニアの JOSHAT KAMZEE JEPKOPOL が 2 位と 2 秒差、3 位と 7 秒差の激戦を制したが、記録は「平凡」な 2 時間 15 分 27 秒に終わった。女子も、マラソン王国ケニアの CAROLINE CHEPTONUI KILEL が歴代 2 位の記録となる 2 時間 30 分 19 秒で優勝した。なお、台湾人では、蒋介石が 2 時間 19 分 14 秒という「好記録」で 20 分の壁を破り、優勝した JEPKOPOL から潜在能力を評価され「ケニアで訓練を受けたらどうかと薦められた」と報じられた。<sup>2</sup>なお、台湾の男子マラソン最高記録は 2 時間 14 分 35 秒であり、20 分を切っているのは 7 人、蔣の今回の記録は本人にとって 2 番目、台湾歴代 7 位に相当するタイムであった。

当日の気象条件はスタート時の気温 20 度、湿度 83% とこの季節にしては、温度湿度ともに高めであった。(筆者ゴール時の 11 時台の気温は 25 度、湿度 70%。) この気象条件については、男子優勝の JEPKOPOL が、「暑すぎた、もう少し早い時間のスタートなら、選手にとっても良かったであろう」と指摘したように、筆者も 10 時頃に陽が照り付けた際には、「脱水症状になるのではない」とかと心配するところもあったが、実際に暑さから熱中症や軽いショック症状に陥る者もいたが、医療関係者の迅速な処置により大事に至る選手は無かったとの由であった。確かに、多くの台湾の



5 40キロ地点の筆者、バックは 101

ロードレース大会のように 6 時スタートであれば・・・とは思った。

蛇足になる筆者自身の走りであるが、昨年同大会は、装備も調整もあまり考えずに臨んだが、多くのマラソン本が指摘するような教科書どおりの運命に陥った。すなわち、30 キロまではそこそこ快調に走れたが、最後の 10 キロに 100 分近くも要する「完全失速状態」となり、言うようにしてゴールにたどり着き 4 時間 47 分台という「屈辱的な」初マラソンとなった。「屈辱」から 1 年、本格的な練習を積んだとは言い難いものの、若干の失敗経験を重ねた状況で臨むことになった 4 度目のマラソンは、昨年はあちこちで散見された「日本頑張ろう」、「台湾ありがとう」のような日台友好アピールの言葉をゼッケンや背中に記した日本人ランナーとの出会いもなく、黙々と走る。25 度の暑さと格闘しながらも余力を残し？ 30 キロを 2 時間 48 分台で通過し、一瞬だが「サブフォーも夢ではないか？」との期待がよぎったが、35 キロ過ぎに「想定内」の失速を起し、その間に「4 時間」と書かれた風船を帽子にくくりつけたペー

表4 完走者人数一覧

種目	完走男子	完走女子	完走合計
フルマラソン	4279	295	4574
ハーフマラソン	13088	2129	15217
9キロ	9093	5337	14430

サー？（だと思）にも抜かれ、ゴール目標を「4時間5分」、「4時間12分」と自己下方修正しながらも、昨年のような「大失速」をすることなくどうにか4時間14分でゴールできた。昨年のレースより33分短縮し、台南マラソンの記録を27分上回る自己ベスト更新となったが、「もう少し行けたはず」という後悔を残したレースとなった。

表4は各レースの完走者の統計である。フルマラソンは定員上限の7千人の参加があったとしても6割ほどの完走率であり、また女子の完走者が男子の1割にも満たない少なさは際立った。21キロと9キロの完走率が8割前後ということを見ると、フルマラソンの制限時間5時間半は、気候の厳しさを考えれば誰でも完走というわけにはいかないようだ。



6 ゴール地点の筆者

#### 4. 気がついたことと展望

最後に、大会運営について善処すべき点を指摘したい。一つ目は、筆者は15分前からスタート地点に並び終えていたが、エリート組の号砲まで10分を切った時点で、アフリカ勢と思われる招待選手が護衛もなく慌てて後ろから人をかきわけて前に進む姿を目撃。「スタートには間に合っただろうか」と他人事とはいえ心配しながらもゼッケン番号を確認しておき、レース終了後に確認したら、何とあたふたと人並をかけ分けていた選手は優勝したJEPKOPOLであった！。「大会関係者の不備で先導を怠ったのか」、「選手自身のミスなのか」は不明なるもスタート10分前の時点で有力選手がスタートラインに欠けていることに気がつかない関係者には問題はなかったのか？試合前に無駄な体力と精神力を遣ったことは、気の毒に

思えたが、同情のし過ぎであろうか？

二つ目は、スタートから仁愛路を走る4キロ地点には中央4車線にしか、チップが反応する「絨毯」が敷いておらず、筆者を含め一部のランナーは、「絨毯」が敷かれていない一番右側の道路を走っていたため、4キロ通過時に自分たちの走っている道路に絨毯が無いことに気づき、慌ててバレーの柵を乗り越えて中央車線に戻る一幕があった。多くの警察関係者とボランティアで成り立っている大会とはいえ、関係者のランナーへの走行場所に対する指示は何もなく如何にもずさんな感じがした。

最後は、「台北マラソン」に直接参加していない住民のマナー問題である。大会終了後、台北市長は市政府の会議で「台北市民が受け入れられるという前提の下に、都市型マラソンへの申し込みを

検討したい」との発言があった。同発言は東京マラソンを意識したものかもしれない。右に対して中華民国陸上協会関係者は「都市型マラソンが国際組織に認証されるには交通規制問題が重要である」と述べていたが、<sup>3</sup>台北市民のロードレース実施時の交通規制に対する不寛容さは、改善の余地が大いにあると感じた。

台湾社会では横断歩道でも基本的に「車両優先」で「譲り合いの精神」が欠けていることは、台湾在住者に長く共有されている認識である。今レース中にもバイクの運転手が、交通規制の警察に文

句や罵声を浴びせたり、制止を振り切り、急発進で道路を横切る姿は時々見かけた。現在のコースで市街地を走るのは全体の3分の1にも満たない12-3キロであるが、東京マラソンのようなレースを実施すると、交通規制の範囲と時間は大幅に増え、市民生活への不便さも増大することになる。もし都市型マラソンが実現できれば、総統府、中正記念堂、101ビル、孔子廟などの著名観光スポットを回り、観光効果も抜群であり、走る側としても普段走れないところを走れる楽しみが持てるランナーとしても待ち望まれる。

<sup>1</sup> 「12万人创新高没跑出新紀錄」『聯合報』（2012年12月17日）頁B4。

<sup>2</sup> 「跑進2：20 蔣介文振臂呼」『聯合報』（2012年12月17日）頁B4。

<sup>3</sup> 「挑戰『城市馬拉松』 交管是關鍵」『聯合報』（2012年12月19日）B1。

## 日台青年交流事業 2013年1月27日～2月3日

交流協会では、日本と台湾との青年交流を促進するため、日本の人文・社会科学分野を学んでいる台湾の大学生を夏季と冬季に日本へ招聘しております。今年度冬季は、平成25年1月27日から2月3日の8日間招聘致しました。ここに、今回招聘した20名のうち、男女各2名の訪日報告書をご紹介します。

### 2012年日本研究支援ウィンターキャンプ報告書

国立台湾師範大学

東アジア学科3年生 李佳洲



交流協会が私に十日間にもわたるウィンターキャンプへの参加資格を与えてくれた事に感謝しています。以前に何度も日本へは行った経験がありますが、この十日間は過去の経験と比べても最も充実したものでしたし、私の日本に対する理解が最も増進した十日間でもありました。厳粛な交流や授業、リラックスした体験や見学、どちらもこの十日間で常に新しい知識を得、体で悟る事が出来ました。

台湾での二日間の授業を含め、新たな知識がまるでわき水のように湧いてきました。

各大学で行われた大学生との交流会は私が最も期待した活動です。大学一年生の時から私は学部内で積極的に日本の各種交流や討論会に参加してきました。しかしずっと先方が日本から来ていて、受動的な感覚をもっており、そのため私は日本へ赴いて行う交流のチャンスをずっと待っていたのです。そして今回ウィンターキャンプの活動で私によりやくその貴重なチャンスが与えられたのです。最初は日台学生会議との懇親会でした。

それは正式な交流会ではありませんでしたが、とても楽しいものでした。日本側学生は台湾に関して一定の知識があり、また指定された議題があるわけでもありません。私達のメンバーにいる謝子淳は組織の幹部を務めており、日本語ができないメンバーも楽しく会話ができました。その後私達は日本の学生とともにカラオケに行きました。しかし意外なことに、最終的に中国語の歌が日本の歌よりも歌った数が多かったのです。

平成国際大学の学生交流はウィンターキャンプの二つ目の交流会です。そして私はここにとても期待していました。交流会で私は日本の大学生の就職活動に関して更に深い知識を得ました。ここで私は台湾と日本の職場の違いを学んだだけでなく、九月からの交換留学の際授業の選択を改めて考えさせられました。私が意外に感じたことは日本の職場で新入社員が入社したがる企業、それと台湾と日本で給料に対する要求の類似点です。日本の就職希望のランキングから若者が会社選択に際して興味を重視しているのだと感じました。これはディズニーランドへの就職希望が男女別に見てもランキング三位であることから明らかです。そして日本人がUターン就職する原因である、故郷への想いも感じる事が出来ました。これは台湾では感じられないことです。

三カ所目は北陸大学での交流です。自分の得意な議題へは振り分けられませんでした。中国・韓国の留学生及び日本の学生と同時に交流できた事で多くの経験を得る事が出来ました。文化とい

う議題で、私達は日本と台湾の違いを討論しただけでなく、中国や韓国の経験も比較し、東アジア全体の各文化に関して討論が出来ました。

そして東京大学の川島真准教授による日本近代史及び日台関係の授業は私の印象が最も深く、得るものが一番大きい活動でした。私はこの活動の応募の際、交流協会に研究計画書を提出しましたが、それは1972年以降の日中台関係に関するものでした。ですから、この方面に関しては一定の資料を探し、研究したことがありました。しかし川島准教授の日台関係の歴史観によって私は新たな啓発を受けました。特に日本統治時代の各種評価の原因分析とその解釈、及び戦後の日台関係などは私がこれまで聞いた事がなかった観点でした。断交後の台日関係に関しては川島准教授の話された内容は私の知識範囲内のことでしたが、私より深く知るため質問をすると、川島准教授は日本の左翼と中国の共鳴及び72体制の方向性に関して話され、私の研究の上で疎かにしていた部分を発見できたと同時に、これらの歴史に於いて一新された視点を与えてくれました。

金沢での三日間に関して、私はそれだけを特に切り離して報告しようと思います。なぜなら飛行機に乗ってから常に驚きと感動でいっぱいだったからです。私は父親の影響から飛行機に乗ることが好きです。ですから、金沢の往復という二度の短い移動すら私の記憶に於いて相当な分量を占めています。金沢に赴いた当日は空が晴れ渡っていて、空高くからでも地上の一切を見渡す事が出来ました。離陸後機上に置いてある雑誌の地図を取り、私の足下で動いている世界を感じながら、窓の外を見てその地形と手に持っている地図とを見比べ、今どの山脈、どの平原を越えたか等を想像していました。ずっと日本の新幹線に乗ってみたいと思っていましたが、金沢への新幹線は二年後

にようやく開通するそうです。しかしこのような体験は小さな頃からよく飛行機に乗っていた私でも今まで味わった事はありませんでした。

飛行機がまだ降りてもいない時から既に私は純白の世界に魅了されていました。空港を出る頃には私の心は既に我慢の限界で、耐えきれず道路の傍にあった雪を踏みしめました。まるでかき氷のようなシャリシャリという美味しそうな音がしたのです！その後スキー場で装備を整え、自由時間で思う存分雪を楽しみました。以前に中国のハルビンで雪を見た事はありましたが、その時は数日間雪が積もっていたので、既に氷の様に固くなっていて、このように手で簡単に掬い雪玉を作れるような雪ではありませんでした。スキー体験は初めてでしたが、山の中腹から転ぶ事も無く爽快な速度で滑り降りてくることができ、この台湾人の心を満足させてくれました。近くにいた子供のように障害物の間をすり抜けてみたかったのですが、やはりそれは雪国で生まれ育ったからこそできることなのです。初日の夜の宿泊は湯涌温泉街の温泉旅館で、「至高のもてなし」という言葉でしか形容できないものでした。

金沢での数日間で私が一番印象に残った事は金沢市の人々の金沢と言う土地に対する郷土愛とその広報活動です。バスに乗ると、寺畑さんが私達に台湾人のために書かれた、金沢を紹介した繁体字の資料を渡してくれました。旅館に入ると湯涌温泉街には金沢と湯涌温泉をテーマにしたアニメ「花咲くいろは」のポスターが貼られていました。翌日にひがし茶屋街を歩いていた時、または三日目に花園公民館と八田與一の故居を訪れた時にも金沢市と金沢市民の自分の住む土地に対する愛情と金沢の魅力をもっと知って欲しいとする気持ちを深く感じる事が出来、私はとても感動しました。

金沢での滞在で、提言せずにはいられないのはPongyiでの一晩です。Pongyiは素朴なゲストハウスで、私が最初に想像していたものとはまるで

違いました。個別の部屋はありませんでしたが、とても心地いい空間が作られていました。ホテルでの宿泊で感じる拘束感は全く感じません。その夜は一緒に温かい鍋を堪能しました。その時にオーナーである MASAKI さんの不思議な人生と Pongyi の成功への奇跡を聞き、そこに宿泊できた事で、私は Pongyi という金沢の一ゲストハウスに対してだけでなく、人生に対して新たな知識を得る事が出来ました。翌日そこを離れる時には誰もが日本で過ごした最も不思議な一晩だったと感じていました。

最終日の行程はとても忙しくはありましたが、その精彩さは失われていませんでした。金沢 21 世紀美術館の展示は今でも私の頭の中に浮かんできます。兼六園の参観時には天気がよくありませんでした。雪がちょうど溶けきったところで、兼六園の 100% の魅力を感じる事は出来ませんでした。それにより私は家族と再度訪れ、兼六園の真なる美しい姿を見てみたいと思いました。

金沢から東京へ戻る際には金沢への往路とスカイツリーから見た夜景の経験があったのですが、帰途も相も変わらず、数万メートルの高さから東京の夜景をみようとししました。しかし天気が良くなく、ようやく夜景が見えた時にはどこだかわかりませんでした。しかし、とても奇妙な景色に出会う事が出来ました。道路が一直線に海へと伸び、その中央にはまるで大きなクルーズ船のような建物があったのです。家に戻りそれを調べてみると、それは東京湾を横切る「海ほたるパーキングエリア」だということがわかりました。この旅行の最後に小さな喜びと驚きをもたらしてくれました。

今回私は初めての日本訪問ではありませんでしたが、この十日間のウィンターキャンプでは各方面に於いて楽しく、充実していました。もともと私の計画では今回のウィンターキャンプは九月の

交換留学の前哨戦と位置づけていました。しかしその効果は遥かに私の予想を超えていました。今回のウィンターキャンプで得た体験、友達、新たな知識が私に与えた影響はきっと将来的にも続くものとなり、引いては私の人生にも大きな影響を与えるでしょう。最後に林賢参団長、交流協会の頼さん、土田さん、そして末石さんに感謝します。私達の冬休みは他人とは全く異なるものになりました。

## 東京金沢での見聞

国立政治大学  
日本語文学科 3 年生 陳亭竹



今回私は二度目の日本訪問でした。しかし多くの「初めて」の感動がありました。初めて東京の寒く清らかな空気と整然とした町並みを感じました。初めて日本の大学に行き、現地の大学生と交流を行い、頭をフル回転させました。初めて雪の上で転がり、スキーのスリルを味わいました。初めて和服を着て、古い町並みを散策しました。多くの初めての体験がこの旅行を多彩にしてくれ、忘れ難い思い出となりました。交流協会の豊富な行程の準備に感謝します。私達の日本での生活部分、活動、そして出発前の集中講義など心配りある準備のおかげで、私達は多くの日本の知識と収穫を得ました。

事前授業は日本の経済、文化、政治や国防にまで及び、私が最も印象深かったのは、張銘今教授の「日本経済と台日経済関係」でした。授業中、教授は 1973 年の第一次石油危機後、日本は重工業からエネルギーの節約技術の開発に発展の中心を移し、それにより「知識集約産業」が発展した

のだとおっしゃいました。これにより続いて発生した第二次石油危機では日本はその波及を免れ、全世界が石油危機により景気の低迷を迎えたのに対し、日本は知識集約型産業によって経済的損害を抑えたのです。日本は早くから危機に対する先見の明があり、また正確な政策を打ち出せる知恵があることにとても感服しました。このような経済の活躍が恐らく日本が第二次世界大戦の衝撃後、急速に世界第二の経済大国にのし上がった原因の一つではないでしょうか。

2011年に発生した東日本大地震によって日本には甚大な被害と莫大な損失がもたらされました。そしてそれは数期連続でのGDPのマイナス成長を引き起こし、日本景気の悪化、経済の衰退に至りました。たとえそうであっても、今回Panasonic Centerのeco ideas HOUSEを参観すると日本の先進的技術やその概念には驚嘆させられました。近年、高度科学技術産業が次第に成熟し、そこから高い利潤を得られる時代は既に過去のものとなりました。重化学工業が石油危機に面して改善を余儀なくされたように、目下の高度科学技術産業も刺激が必要なのです。このとき環境保護の概念を推進している太陽エネルギーがその転機となったのです。近年、二酸化炭素排出量減少のために太陽エネルギーの開発、ハイブリッド車の研究が続けられており、「エネルギー節約製品」が今後の主軸となることは間違いありません。Panasonic Centerのeco ideas HOUSEを参観した時に、人に優しい感应式ライト、「二酸化炭素排出量0」の設計には驚かされ言葉がありませんでした。このような斬新な技術を見学して、グリーンエネルギーに関する技術開発分野の未来は日本がアジアを牽引するのだと感じました。

Panasonic Centerでは科学技術の成果に感嘆したと同時に、大勢の走り回って遊んでいる子供

たちがいたことに驚かされました。台湾の科学博物館では多くが学校の先生か先生が連れて集団参観させている子供たちです。Panasonic Centerで見かけた子供たちは大部分が家族が引き連れていました。科学技術を体感させ、数学や理科の知識を理解させていたのです。ここから、日本の親は教育に対してとても熱心なことが見て取れます。Panasonic Centerは日本到着初日の訪問でしたが、人に優しい科学技術や日本経済への希望、国家の未来を担う主人公たちへの重視がわかりました。それにより私は今後の素晴らしい日程に期待し始めたのです。

二日目、私達は国会図書館、浅草寺、そして最近とても人気のあるスポット「スカイツリー」を見学しました。浅草寺とスカイツリーはとても有名な観光地で、一方は伝統、もう一方は斬新、どちらもとても満喫しました。特にスカイツリーではたった50秒で634mの高さにある展望台に到着するエレベーターの技術があります。同時にエレベーター内に設置されたLEDライトのアニメーションは乗客がエレベーターに乗っている際に時間を潰してくれるという配慮があり、科学技術によって人に優しい設計になっている点はスカイツリーが私達に与える未来的なイメージと符合しています。私にとってそれは暗闇に光る白いクリスマスツリーのようで、その下に広がる東京の夜景は最も美しいクリスマスプレゼントです。しかし、美景も、伝統もどちらも良かったのですが、その日私を最も驚かせたのは国会図書館の見学でした。

私はこれまで地下八階の建物なんて見たことがありませんでした。地下の八階にある中庭から「上」をみると「地面」が見えますが、私は映画の中に登場するような秘密裏の製薬会社で人道に外れる機密を研究しているかのような錯覚を感じました。日本の国会図書館は「収蔵」のために建て

られた図書館で、「貸出し」のためではありません。それにより、一般人が利用できるスペースに大型の書棚は見当たりません。しかし私達は埃避けの靴カバーを履き、識別証明書を首から掛け、解説してくれるスタッフとともに本が隠されている本拠地へと入っていったのです。他の図書館とは比べ物にならないほどの収蔵量が私の目の前に現れました。第二次世界大戦後日本が発行した全ての雑誌、書籍などが集められ、1200万冊近くの書籍資料が全て一分の狂いも無く整頓されていました。保存の難しい新聞や漫画等の資料もデジタル化や方式を換えて保存されています。日本人の物事に対する態度は真面目で、何をやるにも細かく行くと褒める人がいます。また、日本人は妥協を許さず、振る舞いがきちんとしている、と言う人もいます。日本人がどのように書籍を収蔵しているのか、その態度や方法を直に目の当たりにしたら、一体他のどの国が日本と同じ様にできるだろうか、と疑いたくなるほどでした。解説してくれたスタッフは、日本はこれら出版物を国家の大切な情報遺産として考えており、そのために慎重にそれらを収蔵しているのですよ、と話してくれました。その言葉を聞いて、私はとても感動しました。日本人の行動はこんなにも繊細且つ完璧で、その原因は彼らの諦めない精神と態度に他なりません！

日本人の真面目な民族性を見られた以外に、この数日間で私は彼らが融合させた新しい文化を、それと同時に本来の文化を守る能力を見ることができました。江戸東京博物館で私達は精緻な模型を通して江戸時代の人々の生活を理解できました。話題となっている篤姫が乗った籠や東京部分に展示してあったニコラス教会や朝日新聞社を見た他、日本の以前の生活を体験することができました。金沢で私達は日本の三大名園の一つの兼六園を参観し、日本庭園の美を鑑賞しました。また

兼六園からほど近い金沢 21 世紀美術館にも訪れました。興味深いプールの芸術を体験しました。この旅行で私は東京であっても金沢であっても「現代」と「伝統」が併存していることに気づきました。例えば自動車が飛ぶ様に走っている大きな道路の傍で人力車が走っているようなことです。例え生活の周辺でこのような現象が起きているとは限らなくても、博物館からは日本人の伝統文化の重視とそこから新たに生まれる勇気と創意工夫が見て取れます。

七泊八日の日本旅行で、交流協会が豊富な活動を手配して頂いたこと感謝します。それにより私達は多くの場所を見学でき、その中から日本の文化と精神を学ぶことが出来、更には交流、スキー、和服体験という貴重な経験を行うことができました。スキー、和服はとても面白かったのですが、私が最も大切にしたい経験はやはり直接日本人と交流できたことです。台湾で多くの日本人留学生と接することはありますが、日本に来て日本の大学生と会話をしたのは初めてで、とても新鮮な感覚でした。討論の結論は完璧なものだったとは限りませんでした。お互いの意見や考え方を話すことで、私達はお互いの文化や社会現象をより理解することができました。そして更に一歩進み、友達になり、お互いの連絡先を交換したのです。これはとても素晴らしいことです。

今回の活動に参加でき、各地の大学から来た友人、日本人と知り合えたこと、また日本の生活や文化を体験できたことはとても嬉しかったです。また林先生、頼さん、末石さん、土田さんの随行に感謝します。そしてこの活動の心配りある日程手配に感謝します。それにより私は表面的な見学ではなく、目の前にある物事に対してその後ろに隠された意味まで深く考え、そこから多くの刺激を受けることが出来ました。日本が時代の先を



行っている科学技術や、資料の収集、その管理に対する真面目な態度、そして新旧が融合した文化の創造方法等を今回の旅で見聞できました。既に懐かしく感じていますが、私はこれらのことを台湾の友人に紹介し、また一緒にこれらの長所を学んで行こうと思います。

## 日本文化体験の旅

国立成功大学医学部4年 楊博翔



この8日間に及ぶ「日本研究支援ウインター

キャンプ」は私にとってこれ以上ないほど多くの収穫が得られた貴重な旅行でした。出発前の2日間の授業は経済、政治、軍事及び文化等の方面からマクロな視点で日本を見る事ができました。また、日程2日目に川島先生が歴史的な角度から日台関係について話されましたが、歴史と政治の社会に対する意義を改めて考えさせられました。歴史とは史料の閲読によって情報を得るものではなく、違った角度から一つの歴史的事象を推察して、理にかなった解釈を得る事が重要なのです。川島先生は授業の中で、私達が以前社会の教科書で習った歴史的事象の一部を説明し、更に当時の様々な状況の情報を加えると、私達はこれまで当然だと考えていた歴史に新たな解釈を得る事ができました。そして国と国との政治関係においては、「利益」を用いて解釈すると、以前は理解できなかった多くの歴史がとても単純なものに変わりました。

文化方面において、私は日本人がとても丁寧で、細心の注意を払い、礼儀正しい民族であり、時間を守り、製品の品質に厳しい要求をする民族であることを知っていました。パナソニックセンターでの近未来感ある製品や科学技術、それらによる節約への要求、今回の旅行で訪れた各施設や建築物等、今回の旅行を通し、私は肌で上述した日本人の特性を感じる事ができました。日本人は室内の空間や商品を生産・開発する際、人への配慮や様々な可能性を考慮しているのだと感じました。私が最も驚かされたのはトイレを置いて他にはありません。大部分のトイレにはフックが付いていて、コートを掛けられるようになっていましたし、空港のトイレ設計は空間が特に広く、荷物が置きやすくなっています。これらのことはとても小さく、たいしたことがないように見えますが、私達が見過ごす部分でも、日本人は注意を払い、生活の利便性を大きく高めているのです。その他、大部分の店には日英対照の説明があり、旅行者がた

とえ日本語ができなくても理解できるようにしています。サービス態度の方面では、最初に宿泊した京急 EX イン、温泉旅館、学生寮、Pongyi のゲストハウス等々、すれ違う時には必ずスタッフの方から挨拶されます。それは冷たいマニュアル的なものではありません。これが、私が特別だと感じた点です。しかし今回の旅行では全ての文化体験が心地よかったわけではありません。東京の町並みを往来している人々こそが私の慣れない点でした。慣れなかったのは歩く速さです。よく街を歩いている私ですらあの時間と競争をしているような圧力に影響されました。少しでも注意を怠ると疾走している人たちとぶつかってしまうのではないかと感じるほどです。これは恐らく日本人が時間と時間厳守に対する要求なのだと思います。しかし台南で育った私にはあの感覚に慣れることはできず、とても緊張しました。

学生交流は私にとってとても特別な経験でした。なぜなら、私の日本語はそんなに上手くありません。多くの場合で英語か団員の通訳に頼っていました。しかし例えそうであっても、彼らとの討論はとても活発に行えました。なぜなら、彼らは私が日本語があまりできないことを知っていて、簡単な日本語で私と会話をしてくれたからです。日台学生会議との懇親会、平成国際大学での学生交流、北陸大学での学生交流、全ての場所で私は彼らの温かさや人の良さを感じました。今回の交流で私は一種カルチャーショックを受けまし

た。しかしそれは台湾からのものでした。多くの団員は日本語がとても流暢です。ですから、日本語があまり話せない私は交流時でもどうすればいいかわからないことがありました。時にはとてもバツが悪く感じましたが、これにより私自身の日本語学習に対する要求を更に高めようと考えました。このような刺激を受けた事で、私は更に日本語の勉強を頑張ります！今回の交流経験を大切にします。多くの台湾及び日本の友人と知り合えたと同時に、これは民間外交の成功なのです！

金沢の4日間は私が最も好きな日程でした。なぜなら台南と同様にゆっくりとした歩調が感じられたからです。緊張で息もできないような感覚は全くありませんでした。道路を含め町並み全体が同じような色調で統一され、木造建築に松の木が合わさり、微かに雪が積もり、自然の美しさが渾然一体となっています。しかし、風景の他、金沢が最も特別だと感じた点は文化の保存です。金沢には多くの伝統文化があります。金箔、能、手工芸、温泉等々です。同様に台湾にも多くの独特の文化がありますが、このような精緻な文化が永続的に保護するには若い人材を投入し、勉強させる



ことが必要不可欠で、それにより継続的に保存をするチャンスが生まれます。同時にこのような精緻な文化を現代と融合させることで、ビジネスチャンスが生まれますし、観光客が積極的に体験しようと考えます。しかし、商業化しすぎると古い町並みの美しさは無くなってしまいます。金沢という街は商業と文化の間で巧妙にバランスを保っているのです。この点を私達はもっと勉強しなくてはなりません。どのように一都市の文化と歴史をセールスするのか、をです。旧跡に関しては、観光客は一度見ると二回目を見たいとは思いません。しかしもしその文化がより深く観察するに値するのであれば、人々はもう一度訪問したいと感じます。

また、八田與一記念館の見学は以前社会の教科書で習った歴史と烏山頭ダム見学の記憶を呼び起こしました。日本人は自分の故郷の偉人を重視し、小学校の授業にも取り入れ、活発的な教育方法でその歴史を学ばせています。また台湾の嘉南小学校と定期的に交流をしています。このような外交と教育を結びつける有意義な交流こそが八田與一を記念する最良の方法だと感じました！

今回の旅行は私にとって本当に収穫満載の旅でした。異なる学校から参加している台湾人団員と友好を結べた他、多くの日本と中国の友人とも知り合えました。また、スキーの基本的技術を習得できました。最も重要なことは日本文化をより深く理解できた事です。同時に台湾の更なる進歩が望める部分に気づくことができ、台湾の今ある文化を大切にしようと感じました。一つの国や一つの街の文化を理解しようとするれば、ただ風景や名所の写真を撮っているだけでは決して体感することはできません。また、慌ただしいビジネス的なツアー日程では静かにこれら文化の諸処まで考えを及ぼす事はできません。先ほど今回の旅行は私にとって収穫満載だと言いましたが、まだまだ多

くの日本文化において私の理解が届いていないのだと思います。今後私の日本語能力を向上させ、日本に再訪し、今回体験できなかった日本文化とその中に含まれている意義を感じてみたいと思います。

最後に、現代日本研究センターが私にウィンターキャンプへの参加機会を与えてくれた事に感謝します。また、末石さんのガイドや土田さん、頼さん、そして林賢参先生の今回のウィンターキャンプにおけるご苦勞に感謝します。そのおかげでこのウィンターキャンプは内容が豊富で、また順調でした！

## 学習と感動

国立台湾大学  
経済学部3年生 謝子淳



今回この活動への応募は私に取っては二度目でした。私にこの機会を与えてくれた交流協会に感謝します。この旅は各方面に於いて私に大きな利益を与えてくれました。

政治大学での二日間の授業：

私達は先に台湾で二日間の講義を受けました。この二日間で私は日本に対する認識を増進させただけでなく、この旅行は観光や交流、教育的な意味を持つことはもちろん、私自身がつぶさに観察を行う態度で臨まなければならないとはっきり意識させられました。そうすることにより、日本文化と台湾文化の違いを発見し、日本に対して無意識のうちに抱いてステレオタイプの印象を探し出せるのです。

私が経済学部の学生であることから、日本の経

済に関することは多少理解しています。しかし林賢参先生が台日関係について話された時に大きく視野が広がりました。今まで接してきたものは教科書やニュースの情報であり、それらは既に過分に読み解かれた情報であり、先生が話されたのは本当に発生した事実だったからです。更にその真実に解説を加えて下さった事で、私の以前の考え方や立場は確固たる事実根拠の上になりたっているものではないことを理解しました。しかし私自身の願いとして、この部分は台湾教育において必ず検討及び改善をすべきです。このような態度だと台湾と日本の関係を正しく理解する事はできません。

#### 交流活動：

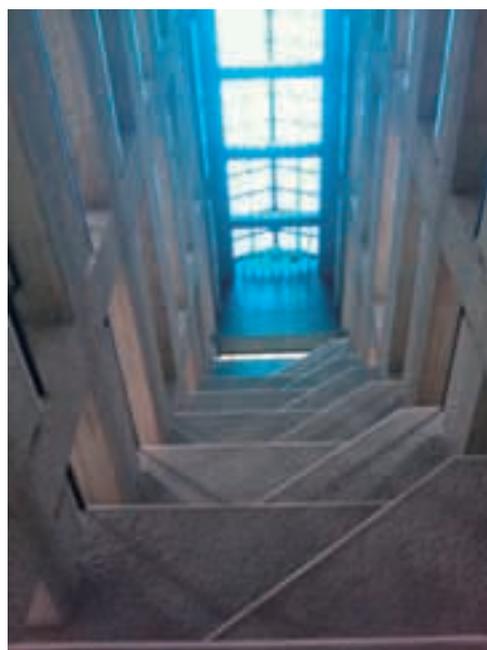
今回手配されていた交流活動の一つ目は日台学生会議との交流でした。私自身そのサークルに属していますので、半年ぶりに友人達に会えてとても嬉しかったです。最初の交流会として台湾が好きな日台学生会議との交流は最良の選択だったと思います。皆最初は手探り状態でしたが、最後には一緒にカラオケに行きました。それこそが心を開いた証明だと言えます！その後平成国際大学の学生と交流しました。台湾に対する理解は深くありませんでしたが、台湾を理解しようと一生懸命で、私達も台湾と日本の違いを探し出そうと努力しました。最後には全員の前で発表を行いました。時間が短かったことによって、討論を深く掘り下げる事は出来ず、また発表内容も充実したものではありませんでしたが、本当に重要な事は討論の過程や交流という経験です。またコミュニケーションの方法を改めて学ぶ事が出来ました。北陸大学での交流では更に私の視野を広げてくださいました。初めて中国人と日本人と同時に交流し、三か国の習慣や考え方の違いを発見できたことはとても興味深いことでした。台湾人は中国人や日本人に似ている点もあり、それらは植民統治の影

響なのかもしれません！

金沢の年長者サークルとの交流は更に得難い貴重な体験でした。普段私達は外国の年長者と接する事は難しく、また接する勇気を持っていません。なぜなら年長者は一国の文化の精粹であり、私達は多くの事を学べますが、同時に私達自身の文化を容易に受け入れてくれるとは限らないからです。しかし今回出会った全てのおじいさんおばあさんはとても温かく、彼らが知っていることを私達に教えてくれました。また葛飾北斎の真筆をも持って来て見せてくれたのです！私達はもちろんこれまで見た事はありませんでしたが、その時参加していた他の日本人も見つからなかったようで、持って来てくれたおじいさんはあまり人に自分が収蔵している事を知られたくないと話してくれましたが、今回私達にはご好意で紹介をしてくれたのです。近距離でこのような収蔵品を目にできるなんて思いもよりませんでした。

#### 参観：

今回の詳細な日程表を手にして、一部の参観は学校での課外授業のように、つまらない知識を得



図書館地下室から地上へ繋がる窓

る行程だと感じていました。しかし実際に訪れてみて私が間違っていたことに気づきました。人生で初めて図書館が面白いと感じました。内部設計は行き届いており、利用者は十分に快適さを感じられ、本の閲覧システムも先進的で、書籍の保護は徹底して行われており、どの点に於いても心配りを感じる事が出来、見習い、学習すべき価値があると感じました。江戸東京博物館はただの展示館ではなく、展示スペース自体がとても素晴らしい設計になっていました。橋の両側には違った時代の東京があり、一目で時代の変遷を見て取ることができます。台湾の博物館とは異なり、体験できる多くの道具が置いてあり、身を以て以前の人々の生活を体験する事ができました。ただ解説を読むような表面的な参観よりもずっと心に深く残りました。

金沢：

実を言うと、金沢は私の頭の中ではただの日本の地名であり、どのような場所であるか全く理解していませんでした。しかし小松空港を出ると、果てのない銀世界が私の前に広がっていました。バスに乗って出発しても、目に映るのは依然として一片の雪景色であり、それに昔の風情が残った建築や自然の風景が相俟って見惚れてしまいました。目の前にある一つ一つの景色を全て記録したくなるほどです。湯涌温泉の玉泉湖はまるで異世界にいるかのような美しさで、ただ移動している時に見える風景なのですが、とても感動的でした。

景色以外に、金沢では金沢自身の広報活動にとっても驚かされました。金沢市役所はわざわざ寺畑さんを派遣して、ほぼ全日程随行させてくれ、私達に金沢について紹介してくれました。他に八田與一記念館やゲストハウス等金沢で出会った全ての人達から私達を心から歓迎してくれていることを感じ取ることができました。また、心の底から



ひがし茶屋街での写真

金沢を愛し、金沢を私達に紹介したいという想いが伝わってきました。それは彼らの温かさであり、そこに商業的な意味合いは全くありません。政府と民間が協力して作り上げることこそが観光客に一生の思い出を作らせる秘訣だと感じました。

台湾の義務教育を受けていれば、八田與一という名前を知らない人はきっといません。台湾に最も貢献した日本人の一人です。しかし私達の知識は花園小学校の小学生たちに及ばないかもしれません。日本は旧跡を保護し、後代に残すことに長けていることは周知の通りです。これまで五度日本に来た事がある私が八田與一の旧宅を参観した際、やはり日本人の旧跡保護の力に感嘆せざるをえませんでした。私が驚かされたのは小学校六年生が授業で八田與一の功績を調べ、それらを整理していたことです。日本人は子供たちに自分たちの地方から輩出された偉人に関して勉強させているのです。その方法は、彼がどんな人物なのかを教えるわけではなく、彼ら自身に資料を調べさせ、自分でそれを整理させているのです。これを見て私が教育を受けてきた15年間で私は本当に重要な能力を養えているのだろうかと思わずにはいませんでした。多

くの人が台湾と日本の教育は同じだといいますが、実際は完全にそうだとは言いきれません。日本がノーベル賞を受賞するような人材を輩出する理由がよくわかりました。台湾人は常に国外で研究を行わないとそれが達成できないのです。

総括：

この旅行全てに於いて、私は多くの驚きと反省を感じました。私の予想を遥かに越える中で、交

流協会が手配した日程というのは、ちょっと見ただけではわからないことも細かく観察して行くと小さなことでもその後ろに隠れている異なった考えの存在に気づかされる、というものでした。今回の活動に参加できた事はとても光栄に感じます。この一週間の時間で学んだことは必ず今後利用する場面がありますし、将来は台日関係にその力を尽くしたいと思います。

## 台湾海峡をめぐる動向 (2012年2月～2013年3月)

## 馬英九政権、尖閣諸島問題で中国とは連携しないと明確に表明

松本充豊 (天理大学国際学部)

## 1. 台湾、尖閣諸島問題では中国と連携せず

## (1) 馬英九総統、中国と連携しない理由を説明

台湾の馬英九政権はこれまでも領土問題では中国と連携しないと表明してきたが、春節(旧正月)後の2013年2月18日、馬英九総統自らが尖閣諸島(台湾では「釣魚台」、中国では「釣魚島」と表記される)問題では中国と連携しないと明言した。

馬総統は、中国国民党(国民党)国家発展研究院で行われた「中国大陸工商建設研究会」という非公開の会合において、春節の休暇で台湾に戻った台商(台湾企業家)の代表たちを前に、尖閣諸島問題で中国と連携しない理由について説明した。その理由とは、①中国共産党(共産党)が1952年の「日華平和条約」を否定していること、②馬政権が提唱した「東シナ海平和イニシアチブ」に共産党が何の反応も示していないこと、③漁業交渉において、台湾と日本が主権問題に触れることを共産党が望んでいないこと、の3つである<sup>1</sup>。

翌19日には、台湾・外交部の夏季昌報道官も「馬総統が説明した3つの理由は非常に明確である」としたうえで、「釣魚台問題であろうと南シナ海での主権争いであろうと、政府が中国大陸と連携することはない」と言明した<sup>2</sup>。実は、馬総統の説明よりも先に、馬政権の立場をもっと明確に示した文書が公表されていた。それが2013年2月8日付の外交部声明である。

## (2) 外交部声明

春節直前の2月8日、台湾・外交部は「釣魚台列島の争いにおいて中国大陸と協力しない我が国の立場」(「在釣魚臺列島争端, 我國不與中國大陸

合作之立場」という声明を発表した。外交部はこの声明についての記者発表は行わず、ウェブサイトの片隅に同声明を掲載した<sup>3</sup>。目立たない形で公表された声明だが、その内容は台湾の立場を明確に示すもので、今後の中台関係にも影響する重要な文書と考えられる。そこで、以下ではその全文を紹介しておく。

「釣魚台列島の争いにおいて、我が国が中国大陸と協力あるいは連携しない理由は以下のとおりである：

(一) 双方の主張の法的論拠が異なり、協力は困難である：

1. 我が方は『カイロ宣言』が台湾および附属島嶼(釣魚台列島を含む)が中華民国の領土に復帰したことの基礎的な法律文書であると主張している。1952年の『日華平和条約』締結後、中華民国と日本との間では台湾および釣魚台を含む附属島嶼の主権移転の法的手続きが完成した。1945年から1972年まで米国が『サンフランシスコ講和条約』に依拠して琉球などの島嶼を信託統治した期間、釣魚台列島は日本の統治下にはなく、どの国家の名義の下でも統治されていない。したがって、米軍の信託統治は主権上の意義はない。我が人民、特に漁民は常にこの島を使用し、妨害されることはなかった。加えて、米軍は『米華相互防衛条約』に依拠し台湾海峡の防衛協力を行っていたので、我が国は米国と交渉する必要がなかった。

2. 中国大陸の立場はカイロ宣言を希薄化し、中華民国の名に言及しないようにし、そのうえ『サンフランシスコ講和条約』と1952年の『日華平和

条約』を否定している。しかし、『日「中」共同声明』および『日「中」平和友好条約』は、台湾およびその附属島嶼の主権移転の法的手続きに言及していないので、中国大陸の主張の法的論拠とならない。中国大陸は琉球が米軍によって信託統治されることを不法とみなし、日本に返還されるべきだとしている。

3. 総合すると、双方の『サンフランシスコ講和条約』と1952年の『日華平和条約』についての立場は明確に異なる。双方の国際法の論述もそれぞれ国際社会に宣告しているので、『禁反言』の原則（自分の行為に反する主張を行うことを禁じる原則）にもとづき、双方は協力できない。

(二) 双方は争いを解決する構想が異なり、協力を行うのは困難である：

1. 馬総統は2012年8月に『東シナ海平和イニシアチブ』を発表した。我が方の立場は、釣魚台列嶼の争いは交渉、調停、仲裁あるいは訴訟などの平和的解決を採るべきというものである。

2. 中国大陸はいまだに我が方の『東シナ海平和イニシアチブ』に正面から回答しておらず、また国際司法裁判所に付託することにも反対しており、平和的解決の具体的構想も示していない。さらに中国大陸はかつてインド、ソ連、ベトナムなどの国と5回の領土戦争を起こした。双方は争いを解決する構想が異なるので、協力は困難である。

(三) 中国大陸は我が方が統治権を有することを承認しておらず、我が国は中国大陸と交渉することはできない：

我が国の立場は、釣魚台列嶼は台湾の附属島嶼で、中華民国の領土というものである。中国大陸は中華民国政府が統治権を有している事実を否定せず、兩岸が平等の地位で釣魚台の争いの解決に参加することを排除してはならない。そうでなければ、双方が釣魚台問題の解決で協力することは

非常に難しい。

(四) 中国大陸の介入により台日漁業交渉が影響を受けており、我が方は中国大陸と協力するのは困難である：

我が国は『東シナ海平和イニシアチブ』を提唱し、『対抗に代えて対話を行う』『交渉により争いを棚上げする』という方式で、日本とまず漁業交渉を通じて漁業の争いを解決し、漁民の権利を守ることを望んでいる。中国大陸側は台日漁業交渉が双方の主権問題に及ぶことに明白な反対を表明し、我が方と日本側との交渉をじゃましている。

(五) 兩岸の協力は東アジアの地域バランスおよび国際社会の関心を顧慮する必要がある：

我が国は東アジアの第一列島線の中の重要な位置にあるが、中国大陸は近年全力で海軍、空軍の力を発展させ、第一列島線の突破を強く望んでいる。長きにわたり、我が国は米国、日本と政治面、経済面および国防面で高度な共同利益を有している。兩岸がこの件で軽率に協力すれば、米国と日本および他の近隣諸国は嚴重な関心を寄せ、我が国と米国、日本との二国間協力関係および東アジア地域の政治と軍事のバランスに影響を及ぼすため、とりわけ慎重であるべきである」<sup>4</sup>。

この声明の重要性や注目点については、小笠原欣幸氏と門間理良氏による詳しい分析があるので、参照していただきたい<sup>5</sup>。ここでは、声明が中国との政治対話を拒否する意思を示したものであることを確認しておきたい。馬政権は1952年の「日華平和条約」を中華民国が台湾に主権を有する根拠として位置づけている。声明では、中国側がそれを認めないので連携できないとしているが、中国側にはとうてい受け入れられるものではない。小笠原氏は、そうした議論を中国と連携しない理由のトップに持ってきたことは、馬政権が

領土問題での連携を否定しただけでなく、政治対話についても事実上拒否する意思を明確にしたことを意味すると指摘している<sup>6</sup>。また、門間氏も、「中国は我が方が統治権を有することを承認しておらず」という表現から、中国側が台湾側の統治権を承認しない限り、中国との政治対話を行うことはないとの考えを示したと見るべきだとしている<sup>7</sup>。

### (3) 馬總統の決断との背景

今回、馬總統が声明の発表に踏み切った理由は何か、考えてみたい。本誌 2012 年 8 月号でも紹介したように<sup>8</sup>、尖閣諸島問題での中台の連携を台湾でも半数以上が支持しているという世論調査の結果もあり、馬總統がむしろ中国と連携する方向に舵を切ることも考えられた。しかし、馬總統がそれを拒否する「決断」を下したのは、ここで中国との連携に踏み切れば、米国や日本との関係が決定的に悪化してしまうと判断したためと考えられる。

1 月 24 日、中国保釣協会のメンバーを乗せた台湾の漁船（事実上は抗議船）が尖閣諸島に向けて出港した<sup>9</sup>。馬政権は出港を見合わせるよう水面下で説得を続けていたが、最終的には漁船の出港を容認した<sup>10</sup>。台湾は自由民主国家であるので、漁民が合法的な手続きを踏んで出港を申請している以上、政府もむやみに出港を阻止できないというのがその理由だった。一方、台湾は漁船の出港については事前に米国側と日本側に伝えていた<sup>11</sup>。

台湾は米国と緊密な連携を維持してきたというのが馬政権の認識だった<sup>12</sup>。しかし、米国側は納得しておらず、台湾への懸念を表明した<sup>13</sup>。漁船で出港した中国保釣協会のメンバーが中台連携を訴えたことで、日本側では不満と警戒感が高まり、米国も公式なルートを通じて台湾側に抗議する事態となった。日米両政府が今回の出港を「挑発行

為」と認識していることを知った馬總統は、事態の深刻さに驚愕したとも伝えられている<sup>14</sup>。総統府は 2 月 4 日、「これまで何度も説明している通り、釣魚台の問題について中国大陸と協力することはない」との声明を発表するとともに、5 日には国家安全会議を開き危機への対応に乗り出した<sup>15</sup>。

さらに、2 月 8 日には米国の元国務省高官が、米国が台湾に何を望んでいるのかを語っている。米国の保守系シンクタンクであるヘリテージ財団と全米台湾同郷聯誼会が開催した「米台関係フォーラム」で、ランディ・シュライバー元国務次官補が、「尖閣問題に台湾が加わりさらに混乱させることは、米国にとって喜ばしい事態ではない」と発言した<sup>16</sup>。シュライバー氏は、台湾には「より積極的、より建設的な」働きを期待する、少なくとも台湾は「建設的な解決策にとっての問題や障害になるべきではない」と述べて、建設的な役割とは、①台湾は尖閣問題で中国と一切協力しないこと、②台湾は日本と協力し、日台関係の改善に力を注ぐこと、③不透明で混乱している状況に加わらないこと、の 3 点を指摘した<sup>17</sup>。共和党系のシュライバー氏の発言が民主党のオバマ政権を直接代弁したものとはいえないが、米国側の台湾に対する認識をある程度伝えるメッセージだったといえよう。

いずれにせよ、馬政権は台湾の安全保障にとって重要な米国、日本との関係を重視し、中国とは連携しないことを宣言した。それは、尖閣諸島への中国の度重なる圧力にも日本が冷静な対応を続け、そのような日本政府に米国政府が一貫した支持を与え、さらに台湾も日本との漁業交渉を続けるなかでの選択だった<sup>18</sup>。

### (4) 効果的な意思表示を狙った馬總統

馬總統の発言には、中国側に対して明確で効果的な意思表示を狙ったふしがある。まずは、国民

党に集まった台商を相手に選んだことである。2月19日付の『聯合報』は、中国にいる台商の多くが、日中間の軍事衝突に発展した場合、尖閣諸島の主権は台湾海峡兩岸に属していると表明するよう迫られていたことを伝えている。国民党の党代表でもある台商は、馬總統にそのことを伝え、もし東シナ海で軍事衝突が発生した際には、国民党にも同様の声明を発表してもらいたいと語っていた<sup>19</sup>。つまり、会合に集まっていたのは、中国の意向を受けて、国民党に中国との連携を訴えにきていた台商であり、馬總統はあえて彼らに向かって中国と連携しない理由を語ったのである<sup>20</sup>。

次に、発言が行われたタイミングである。発言の翌日（2月19日）、北京では共産党の「2013年対台湾工作會議」が開催されている<sup>21</sup>。この會議では、中台兩岸の交流を制度化すると同時に、政治対話を強力に推進すべきであるとの方針が示された。そして、中台兩岸による交流の質と効率を高め、制度化を積極的に推進するとともに、中台の学界を鼓舞激励して、民間から中台兩岸の政治問題を解決に向けた対話を進めていくことが求められた<sup>22</sup>。中国側がこのように政治対話への期待を強く表明しようと準備していた矢先に、馬總統はそれに冷水を浴びせるがごとく政治対話を拒否する明確な意思表示を行ったのである。

#### （5）憤りを隠せない中国

馬總統の発言に対して、中国側は当初これといった反応を示さず、表面上は無視したとってよい。『環球時報』<sup>23</sup>や香港の『中国評論』<sup>24</sup>が、基本的には台湾・中央通訊社が配信した記事を転載する形で事実関係を伝えたが、『人民日報』はこの話題を一切取り上げていない。

中国側の反応が伝わり始めたのは、3月に入ってからのことである。中国語のニュースサイト「多維新聞」は3月5日、北京の消息筋の話として、米国の圧力を受けて台湾が「保釣」（釣魚台を守る

こと）での中国と連携を拒絶したことに、共産党の指導部が極めて強い不満を募らせていると報じた。この記事は、「保釣」での中台連携は兩岸関係に対する台湾側の誠実さを測る尺度であるとしたうえで、馬英九の実際の行為は彼の偽りを反映しており、警戒心が必要であると述べている。さらに、釣魚台問題で米国の言い分を鵜呑みにすれば、自ら気概のなさを示すだけでなく、台湾が大切な「主権」を失うことになり、「馬英九は中華民族の歴史的罪人となるであろう」と強い口調で批判している<sup>25</sup>。

翌3月6日には、國務院台湾事務弁公室（国台弁）の王毅主任が全国人民代表大会の台湾省代表団との討論会で、「釣魚台は中国の領土であり、釣魚台の主権を確保することは兩岸の同胞の共通の責任である」と改めて強調したうえで、「釣魚台の主権を確保するのに、兩岸にそれぞれのやり方であっても構わないが、我々の態度は動揺してはならないし、目標は一致せねばならない、さもなければ祖先代々にも、子子孫孫にも申し訳が立たない」と述べた<sup>26</sup>。別の報道では、王主任がこのとき馬政権を名指して「『保釣』での兩岸の連携を拒絶した」と指摘し、中国側の指導部も「馬英九は民族の大義、根本的な是非において民族の気概を失った」と強い不快感を示していることが伝えられた<sup>27</sup>。

さらに、3月21日付の『環球時報』には政府系シンクタンクの関係者による論評が掲載され、日本に対抗するため、台湾が「保釣」の第一線を歩み、主としてその責任を担うように、世界中の華人が台湾に圧力をかけるよう呼びかけている。これは、尖閣諸島問題をめぐる争いにおいて、中国が日本に対してとるべき5つの非軍事的手段のうちのトップにあげられている<sup>28</sup>。

#### （6）政治対話をめぐる温度差

ところで、王主任は3月6日の討論会終了後、

「兩岸関係がここまで発展した以上、もはや人為的なタブーや空白を設けてはならない」と述べている。さらに、「兩岸間に長年存在する政治上の敏感な問題に対して、兩岸の各方面と民衆がますます関心を寄せ、それを重視していることに目を向けるべきだ」と強調した<sup>29</sup>。

その翌日（3月7日）、馬総統が語った内容からは、政治対話をめぐる中台間の温度差がはっきりとうかがえる。馬総統は台北で開催されたシンポジウムで、「大陸側は当然兩岸がもっと政治面で関係を持ちたいと考えているだろうが、それは台湾にとって敏感なものだ」と述べた。馬総統は「先人の経験を受け継いで新たなものを創造するような兩岸関係の構築が、いわゆる『政治関係』よりもさらに重要である」と指摘したうえで、政治的な議題では主権に関わる難しい議題が避けられず「非常に厄介だ」と語った。そして、厄介な主権に関わる議題を棚上げすれば、双方が前に向けて邁進できるし、「この数年では解決できない難題」に触れさえしなければ、双方ともさらに一歩前進できるとの考えを示した<sup>30</sup>。

## 2. 連戦氏、2年ぶりに中国を訪問

### (1) 中国の新旧指導者と会見

国民党の連戦名誉主席が2月24日、同党の政治家や台湾の実業家ら30人あまりを引き連れて、2年ぶりに中国・北京を訪問した。連氏一行は同日夜、釣魚台国賓館で開かれた国台弁の王毅主任と海峡兩岸関係協会（海協会）の陳雲林会長主催による晩餐会に出席した<sup>31</sup>。連氏は北京滞在中、習近平総書記、胡錦濤国家主席、賈慶林全国政治協商会議主席など中国の新旧指導者と相次いで会見した<sup>32</sup>。

2月25日には、習総書記との会見が行われた。連氏は習氏が総書記就任後、初めて会見する台湾側関係者となった。両者の会見が実現したのは、

胡主席が習氏に勧めたためといわれる<sup>33</sup>。今回、中国側が連氏を招待したのは、胡氏が国家主席のうちに習氏への顔つなぎを行うのが目的だったと考えられる。

習氏は連氏に対して、「兩岸関係の平和的發展を引き続き推進し、兩岸の平和統一を促進することは、新たな中国共産党指導部の責任である」と述べた。「台湾同胞の權益を守り、台湾同胞の福祉を發展させることは、大陸側が何度も公に表明してきたことで、中国共産党の新指導部も承諾していることである」としたうえで、「我々は対台湾工作の大方針の連続性を維持するし、一つの中国原則を終始堅持し、引き続き兩岸の交流と協力を推進し、兩岸の同胞の団結と奮闘を促すよう努力し、兩岸関係の平和的發展の政治、経済、文化、社会的な基礎を強化し深化させる」と表明した。

さらに、習氏は「中華民族の偉大な復興を実現することは、近代以来の中華民族の最も偉大な夢である」として、「台湾が大陸とともに發展し、兩岸の同胞が『中国の夢』を共同で実現することを我々は心から望んでいる」と強調した<sup>34</sup>。

これに対して、連氏は「兩岸関係の平和的發展は逆転させてはならず、また逆転することもない正確な道である」との考えを示した<sup>35</sup>。さらに、習氏に対して「一個中国、兩岸和平、互利融合、振興中華」という16字の主張を提起したと伝えられた<sup>36</sup>。

2月26日、連氏が胡主席と会見した際には、胡氏は「この数年、兩岸関係には一連の重大な進展があり、兩岸関係の平和的發展という新たな局面が開かれたが、こうした成果を目にして我々は十分に満足している」と語っている<sup>37</sup>。一方、連氏は、兩岸の政治対話と交渉は「将来避けては通れない課題」であるとの見解を示したと報じられた<sup>38</sup>。

## (2) 波紋を呼んだ連氏の発言

台湾メディアは連氏の事務所が発表したプレスリリースをもとに会見の様相について伝えていたが、その内容の一部が台湾で波紋を呼んだ。連氏が習氏に対して提起したとされる「一個中国、兩岸和平、互利融合、振興中華」という16字の主張、そして、胡氏に対して語ったとされる、兩岸の政治対話は避けては通れないという趣旨の発言である。

前述のとおり、馬政権は中国との政治対話を事実上拒否する意思を明確に示していたが、胡氏に対する連氏の発言はそれとは食い違う内容だった。また、台湾側が「一中（一個中国）」（一つの中国）にふれる際には、必ずその後に「各表」（それぞれが表明する）をつけて、中台双方が「一つの中国」の内容をそれぞれ解釈できる余地を残している。しかし、連氏が提起したとされる「16字」では「それぞれが表明する」の部分が抜け落ちていた。この点について、民進党中国事務部は2月26日、「一つの中国」だけを残して「それぞれが表明する」をなくした連氏の表現は、完全に共産党の統一戦線工作と歩調を合わせたものだと、これを強く批判した<sup>39</sup>。

総統府は同日夜、プレスリリースを発表し、連氏の中国訪問は「民間人の身分による」もので、馬総統は連氏に対して「特定の任務を付託してはいない」と表明した<sup>40</sup>。行政院大陸委員会（陸委会）の王郁琦主任委員も同日、「総統府は連氏の訪中を私人による民間交流と位置づけており、総統も特定の任務を付託していない」と述べたうえで、中国側との「政治協議は優先事項ではない」との認識を示した<sup>41</sup>。さらに、総統府の李佳霏報道官は、2月22日に行われた訪中前の会見を含めて、連氏から「16字」の形で馬総統に提起されたことはないことを強調した<sup>42</sup>。これに対し、連氏事務所の丁遠超主任は28日、馬総統との会見で連氏は「16字」の内容にはふれていると反論したが、李報道

官も同日、連氏から「16字」の形での提起はなかったと改めて強調した<sup>43</sup>。

## 3. 中国で「两会」が開催される

### (1) 温家宝総理、最後の政治活動報告

3月初旬、中国で「两会」（全国人民代表大会・中国人民政治協商会議）が開催された。3月5日から17日までの13日間、第12期全国人民代表大会（全人代）が北京の人民大会堂で開かれ、これと前後して3月3日から12日までの10日間、中国人民政治協商会議（政協）第12期全国委員会第1回会議が開かれた。

3月5日午前に開幕した全人代では、温家宝総理が10年の任期で最後となる政治活動報告を行った。温総理は過去5年間の兩岸関係について、「重大な転換を実現した」として「三通」の全面的な実現をあげるとともに、「兩岸経済協力枠組み協定（ECFA）に調印し、兩岸の全方位的な交流の構造を形成し、兩岸関係の平和的發展という新たな局面を切り開いた」と振り返った。また、同報告の最後の部分では「我々は中央の対台湾工作の大局的な方針を堅持し、兩岸関係の平和的發展という重要思想を全面的に貫徹し、兩岸関係の平和的發展の政治、経済、文化、社会的な基礎を強化し深化させ、心を合わせて中華民族の偉大な復興を実現する過程において祖国統一の大業を完成させねばならない」と述べて報告を締めくくっている<sup>44</sup>。

### (2) 新体制の発足

昨年11月の共産党第18回党大会に続き、今回の两会でもスムーズな権力継承が行われ、習近平・李克強指導部という新体制が正式に発足した。李克強総理は3月17日の記者会見で、「兩岸はともに一つの中国に属しており、兩岸に暮らすのは血のつながった同胞である」と語り、「一つの中国

を堅持し、同胞の情を守りさえすれば、兩岸関係の発展の空間と潜在力は巨大なものだ」と述べた。さらに、「新政権は前政権が約束したことを実行する」としたうえで、「我々は台湾と発展の機会をともに享受したい」と述べた<sup>45</sup>。

台湾関連の人事では、国台弁主任の王毅氏が外交部長に就任したことが注目される<sup>46</sup>。後任の国台弁主任には外交部常務副部長の張志軍氏が就任した<sup>47</sup>。また、外交部長の楊潔篪氏が國務委員に昇格し、前任者の戴秉国氏に代わり外交全般を統括することになった。党内序列4位の俞正声氏は、就任が確実視されていた全国政治協商会議主席に選出された<sup>48</sup>。俞氏と楊氏は慣例にもとづき、習総書記が組長を兼務する党中央対台工作領導小組の副組長、秘書長をそれぞれ務めることになる<sup>49</sup>。

台湾の『聯合報』は、5年前の王毅氏と同様に今回の張志軍氏のケースでも、国台弁の主任が共産党の中央外事工作領導小組のメンバーから選ばれたことから、中国側はすでに台湾問題を単なる「兩岸」としてではなく、国際的思考を取り入れたアジア太平洋地域における大国戦略という角度から捉えていると指摘している。また、王氏が外交部門出身の知日派であるのに対し、張氏は党中央統一戦線工作部出身で対米外交に携わってきた人物であることから、今後の中国側の対台湾工作は党中央台湾工作弁公室（事実上、國務院台湾事務弁公室と同じ）が党中央統一戦線工作部や外交部と連携することで、より大局的な観点を備えたものになるだろうとの見方を示している<sup>50</sup>。

### （3）王毅氏の離任、張志軍氏の着任

国台弁主任の務めを終えた王毅氏は3月17日、台湾メディアの記者団に対して自身の「兩岸の夢」を語った。王氏は「私が一番望んでいるのは、兩岸の同胞が過去の憎しみや恨みを捨てて、手を携えて中華を振興し、中国人として世界における尊

厳と榮譽をともに享受することだ」と語った。そして、「兩岸の同胞が手を携えて中華を振興し、祖国の平和統一を推進してこそ、本当に意味での民族の復興を実現できる」のであり、「これこそ私の兩岸の夢だ」と述べた<sup>51</sup>。

一方で、王氏は「最も残念なことは、これまで台湾を歩き回るチャンスがなかったことだ」と語り、国台弁主任の訪台について「機はほぼ熟している」との認識を示し、次の主任が早いうちに台湾に行けるよう望んでいると述べた<sup>52</sup>。これに対し、台湾・陸委会の王郁琦主任委員は3月20日、立法院での答弁で「大陸の国台弁主任の訪問を歓迎するが、適当なタイミングで、適当な身分で、各種の条件がうまくマッチすることが条件である」として、「そうした条件を整えば、私も陸委会主任委員の身分で大陸を訪問したい」と述べた。

張志軍氏が3月17日の着任後、初めて公式の場に姿を見せたのは、3月22日、福建省平潭で開催された「第11回兩岸関係研討会」の開幕式だった。国台弁主任として挨拶に立った張氏は、「兩岸関係にはいくつかの政治的な難題が存在している。これらの問題は非常に複雑で、解決するのは容易ではない」との認識を示す一方、「第1にこれらの問題を正視しなければならず、人為的にタブーを設けてはならない：第2に積極的に思考して、解決の道を探る努力をすべきである：第3に易しいことから先に、難しいことは後で、順を追って一步一步進め、徐々にコンセンサスを積み重ねていくべきである」と強調した。そして、「当面、兩岸の民間で対話を始めるのが実現可能な方法であり、兩岸のシンクタンクが共同で平和フォーラムを開催し議論するというのもよい提案だ」と述べた<sup>53</sup>。国台弁主任の台湾訪問についても、王毅氏の発言は「私の願望を表現したものだ」と語り、王郁琦氏が示した条件については「全く必要ないと思う」とコメントしている<sup>54</sup>。

#### 4. 中台のメディア交流に関する世論調査

台湾の行政院大陸委員会（陸委会）は2013年3月22日、定期的に行われている台湾住民の中台関係に対する見方についての世論調査（「民眾對當前兩岸關係之看法」民意調査）の結果を発表した<sup>55</sup>。今回の世論調査では、中台間の今後の大きな議題となるメディア交流についても調査が行われた。以下、関連する項目について紹介する。

##### （1）中国におけるネット規制について

現在、中国では台湾のニュースサイトに対する規制が行われているが、台湾では中国のニュースサイトに対する規制は行われていない。こうした中国のネット規制が中台間のニュースや情報の自由な伝達に与える影響について、「良い影響がある」と答えたのはわずか3.2%、「影響はない」と答えたのが15.7%であったのに対して、69.8%が「悪い影響がある」と答えている（<表1>）。

<表1>

良い影響がある	影響はない	悪い影響がある	わからない
3.2%	15.7%	69.8%	11.3%

（出所）「『民眾對當前兩岸關係之看法』例行的民意調査問卷各題百分比配布表（調査日期：2013年3月7日至10日）」、2013年3月、2頁。

<表2>

強く同意する	同意する	同意しない	全く同意しない	わからない
25.8%	46.1%	12.6%	7.3%	8.2%
71.9%		19.9%		8.2%

（出所）「『民眾對當前兩岸關係之看法』例行的民意調査問卷各題百分比配布表（調査日期：2013年3月7日至10日）」、2013年3月、3頁。

<表3>

強く支持する	支持する	支持しない	全く支持しない	わからない
22.0%	57.3%	8.4%	3.3%	9.0%
79.3%		11.7%		9.0%

（出所）<表2>と同じ。

##### （2）台湾と中国とのメディア交流について

台湾が中国とのニュース・メディアの交流を行うことによって、中国のメディア関係者に台湾における報道の自由を実感させるべきであるとの意見については、71.9%が「同意する」、19.9%が「同意しない」と答えている（<表2>）。

##### （3）台湾と中国とのマスメディアの交流について

中台間の情報の伝達を促進させるため、中台双方が引き続きマスメディア（テレビ、映画、ラジオ、ニュースなど）の交流を行うことを支持するかどうかについて、「支持する」と答えたのは79.3%、「支持しない」と答えた11.7%を圧倒した（<表3>）。

陸委会はこうした調査結果を受けて、「報道の自由は国際社会における普遍的な価値であり、兩岸のあいだでの報道の交流において最も重要なのは情報の対等な交流と自由な流通である」との見解を示している。そして、「『黄金の十年、兩岸の

平和』というビジョンでは兩岸間での情報の対等なコミュニケーションの促進を施政の重点に盛り込んでいる」としたうえで、「今後、政府は引き続き兩岸間のマスコミュニケーションとニュース・メディアの相互交流を拡大、深化させ、メディア改革と情報の開放という理念を広めるとともに、兩岸間のニュースや情報の交流環境を改善させることで、兩岸の人々が自由で完備された情報伝達の恩恵を享受できるようにする」との考えを示している<sup>56</sup>。

なお、今回の世論調査では、住民の中台関係に対する見方についての調査結果も示されている。「すぐに統一すべき」と答えたのが2.6%、「すぐに独立を宣言すべき」と答えたのが5.0%であるのに対して、86.1%という圧倒的多数が相変わらず「現状維持」を支持している<sup>57</sup>。

## 5. 馬英九総統、新ローマ法王の就任式典に出席

### (1) 馬英九総統、フランシスコ1世に祝電

ローマ法王庁（バチカン）では、ベネディクト16世が2013年2月末にローマ法王を退位したのを受けて、3月12日（現地時間）、新法王を決めるコンクラーベ（法王選挙会）が始まり、13日午後にはアルゼンチン出身のホルヘ・マリオ・ベルゴリオ枢機卿が第266代法王に選ばれた。南米出身の法王は史上初で、法王としてはフランシスコ1世を名乗ることが決まった。

馬総統はこの知らせを受けて、台湾にあるバチカン大使館を通じて新法王に祝電を送った。中華民国（台湾）はバチカンと1942年に国交を樹立している。現在、中華民国と外交関係のある23カ国のうち、ヨーロッパで唯一、国交を維持しているのがバチカンである。馬総統は祝電のなかで、「中華民国政府、国民、国内のカトリック教会を代表して新法王に対して衷心より祝意を表す」とと

もに、「新しいローマ法王の英知あるお導きのもと、国際社会が引き続き世界平和の促進に尽力し、両国が宗教、学術、文化、平和、慈善のパートナー関係を継続的に深めて、それにより人類全体の平和と福祉のために貢献することができるものと確信している」と表明した<sup>58</sup>。

### (2) 馬総統夫妻、新法王就任式典に出席

馬総統夫妻は3月19日（現地時間）、バチカンでのフランシスコ1世の法王就任式に出席した。馬総統にとっては総統就任後初のバチカン訪問となったが<sup>59</sup>、中華民国（台湾）総統がローマ法王の就任式に出席するのも今回が初めてとなった<sup>60</sup>。出発前、馬総統は「今回は私の総統就任後初めてのバチカン訪問となるが、新法王フランシスコ1世の就任式典に出席し、新法王に祝意を伝えるためだけでなく、中華民国がヨーロッパにおいて唯一国交のあるバチカンを重視する姿勢を示すものでもある」と強調したうえで、「今回の訪問を通じてさらに両国の友好関係を強化し、協力関係を促進したい」と語った<sup>61</sup>。

馬総統夫妻は3月18日にイタリアのローマにあるレオナルド・ダ・ヴィンチ国際空港に到着、翌19日午前9時30分よりサンピエトロ広場で行われた新法王就任式典のミサに出席した。式典は米国のバイデン副大統領やドイツのメルケル首相ら各国の元首や特使が出席して執り行われ、馬総統夫妻の座席は各国元首の席の前列に配された<sup>62</sup>。

今回、現地での各国元首らとの会談は計画されていなかったが、馬総統は式典終了後の記者会見で、式典開始前には友好国や国交のない国々の元首や特使らと交流し、式典後には新法王と挨拶することもできたと言っている<sup>63</sup>。

なお、馬総統のバチカン訪問について、中国・外交部の華春瑩報道官は3月15日、「兩岸双方が大局から出発し、関連する敏感な問題を慎重に処

理し、得難い兩岸関係の平和的発展の良好な局面を共同で守ることを希望する」とコメントしている<sup>64</sup>。

## 6. 中国の「節約令」、台湾にも影響

### (1) 習近平総書記、反腐敗への強い決意を示す

昨秋、共産党の総書記に就任した習近平氏が、腐敗問題の解決に取り組む姿勢を強調したことは記憶に新しい。昨年12月4日の中共中央政治局会議では、習総書記は党員の綱紀粛正を図るべく公金を使った過度な注文や浪費を戒めた「節約令」を発した。「習八条」と呼ばれる8つの規定がそれである<sup>65</sup>。さらに、本年1月22日の党中央規律検査委員会第2次全体会議では「断固として清廉な党を建設して反腐敗闘争を深めていく」と演説し、党幹部らの腐敗を厳しく取り締まる決意を改めて示すとともに、彼らに浪費や官僚主義を正すよう求めた<sup>66</sup>。習総書記は「『トラ』も『ハエ』も一緒に叩かねばならない」<sup>67</sup>と腐敗の一掃を強調するとともに、「『上に政策あれば、下に対策あり』といった中央の政策に地方が従わない風潮も決して許さない」と述べた<sup>68</sup>。

### (2) 影響は台湾の経済にも

習総書記の節約令は台湾の経済にも影響を及ぼしつつあるようだ。3月28日、台湾・苗栗で「兩岸旅遊業聯誼会」が開催された。これは中台の旅行業界関係者が集まる会合で、毎年の中台双方の持ち回りで行われている。台湾で開催される際には、中国側から国家旅遊局の副局長級以上の人物

を団長に31の省・市から関係者が参加するが、今年は参加者が昨年に比べ100名減少したという。主催者である台湾側の旅行公会は、中国側では節約令の関係で公費出張が難しくなっていると分析している<sup>69</sup>。

また、旅行業界の関係者は、節約令の影響が最も大きいのは台湾を訪れる調達団であるとの見方を示している。ここ数年、中国の各省・市から大規模な調達団が次々と台湾を訪れ、台北市内の5つ星レベルのホテルでは部屋の予約が取れず、レストランは満席という状態が続いていた。しかし、今後は調達団も高級ホテルでの滞在を避けて、大規模なセレモニーや豪華な宴会もひかえるものとみられる。本年4月以降に訪台が予定されている広西チワン族自治区の調達団は、贅沢だと批判されないように宿泊するホテルのランクだけでなく、これまでは高級メニューを選んでいた食事の内容や食材の値段までも気にするようになっていくという<sup>70</sup>。

節約令は胡蝶蘭の売り上げにも影を落としている。中国では昨年の第18回党大会以降、政府機関が主宰する会議で花を飾ることが禁止された。これが胡蝶蘭の売り上げにひびいている模様である。現在、中国の胡蝶蘭業者のうち大規模な業者の多くが台商だが、春節前後は彼らにとって一番の稼ぎ時であり、例年この時期だけで年間の売り上げの3分の2以上を稼ぎ出す。ところが、今年は中国市場での業績が振るわず、ある大手業者の売り上げは例年の3分の1ほどにとどまったという。この業者は政府部門での需要の低下がその原因とみている<sup>71</sup>。

<sup>1</sup> 「兩岸不聯手保釣總統提3理由 (102021822:05:16)」中央通訊社ウェブサイト (<http://www.cna.com.tw/News/aIPL/201302180345-1.aspx>)、2013年2月18日閲覧。馬總統の発言については、中央通訊社から事実関係を報じたごく短い記事が配信されただけで、他の台湾メディアはそれを転載して伝えたにすぎない。日本メディアでは『産経新聞』が最初に伝え、その後は『毎日新聞』も報じている（「尖閣で中国と連携せず、理由を台湾が初公表日台漁業協議干渉や軍備増強でも中国を批判 (2013.2.21 08:21)」MSN産経ニュースウェブサイト (<http://sankei.jp.msn.com/world/news/130221/chn13022108440003-nl.htm>)、2013年2月21日閲覧、「沖縄・尖閣諸島：問題解決で台湾総統『中国と協力できぬ』 (2013年02月23日)」毎日jp ウェ

- ブサイト (<http://mainichi.jp/select/news/m20130223ddm007030059000c.html>)、2013年2月23日閲覧。
- <sup>2</sup> 「我方：兩岸不會聯手保釣」『中國時報』2013年2月20日。
- <sup>3</sup> この声明は外交部ウェブサイトの「外交部聲明」のページではなく、「外交資訊」の下位項目である「海域資訊及政府聲明」のなかの「釣魚臺列嶼之主權聲明」のページにある。なお、声明の所在については産経新聞社台北支局長・吉村剛史氏にご教示いただいた。
- <sup>4</sup> 「在釣魚臺列嶼爭端，我國不與中國大陸合作之立場（2013/2/8）」台湾・外交部ウェブサイト (<http://www.mofa.gov.tw/official/Home/Detail/dfdd01ec-4786-400d-a4ed-47c947bc2005?arfid=2b7802ba-d5e8-4538-9ec2-4eb818179015&opno=027ffe58-09dd-4b7c-a554-99def06b00a1>)、2013年3月22日閲覧。
- <sup>5</sup> 小笠原欣幸「馬英九政權は尖閣諸島問題で中国と連携しない（2013年2月27日）」小笠原ホームページ (<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ogasawara/analysis/mayingjieoupeaceinitiative3.html>)、2013年2月28日閲覧、門間理良「馬英九政權、尖閣処理で中国と連携しない旨を明確に表明」『東亞』no.550、2013年4月、50～54頁。
- <sup>6</sup> 小笠原、同上論文。
- <sup>7</sup> 門間、前掲論文、53頁。
- <sup>8</sup> 松本充豊「台湾海峡をめぐる動向（2012年6～7月）交流と対話をめぐる兩岸三党の動きと台湾の領土問題」『交流』No.857、2012年8月、44～45頁。
- <sup>9</sup> 詳しくは、石原忠浩「台湾内政、日台関係をめぐる動向（2013年1月上旬－2013年3月上旬）江宜樞内閣の成立と第四原発建設反対デモの実施」『交流』No.864、2013年3月、52頁、を参照。
- <sup>10</sup> 「美日抗議保釣海巡署長異動？ 全家福行動掀外交紛擾馬總統雖堅持釣魚台主權也促須有效管理民間保釣船王進旺去留受關注」『中國時報』2013年2月6日。
- <sup>11</sup> 「我漁船赴釣魚台美不以為然（2013-1-26）」自由電子報ウェブサイト (<http://www.libertytimes.com.tw/2013/new/jan/26/today-p4.htm#>)、2013年1月26日閲覧。
- <sup>12</sup> 「媽祖保釣金溥聰：美方了解情況」『中國時報』2013年1月26日。
- <sup>13</sup> 前掲資料「我漁船赴釣魚台美不以為然」。
- <sup>14</sup> 前掲資料「美日抗議保釣海巡署長異動？ 全家福行動掀外交紛擾馬總統雖堅持釣魚台主權也促須有效管理民間保釣船王進旺去留受關注」。
- <sup>15</sup> 同上資料、「總統府重申：不會與大陸合作」『聯合晚報』2013年2月4日。
- <sup>16</sup> シュライバー氏は共和党のブッシュ（子）政権でアーミテージ國務副長官の下でアジア外交を担当し、台湾問題を取り仕切った人物である。
- <sup>17</sup> 「美官員：台灣別在在釣島添亂否則美國會不高兴（2013-02-10 09:05）」環球網ウェブサイト (<http://taiwan.huanqiu.com/news/2013-02/3634674.html>)、「薛瑞福：美在釣島並不中立台灣不要添亂（2013-02-10 00:20:14）」中国評論新聞網ウェブサイト (<http://www.chinareviewnews.com/doc/1024/3/5/1/102435181.html?coluid=1&kindid=0&docid=102435181&mdate=0210085326>)、2013年2月19日閲覧。
- <sup>18</sup> 門間、前掲論文、53頁。
- <sup>19</sup> 「陸、日若衝突台商有表態壓力」『聯合報』2013年2月19日。
- <sup>20</sup> 小笠原、前掲論文。
- <sup>21</sup> この会議では戴秉國國務委員が議事進行役を務め、国台弁の王毅主任が活動報告を行ったほか、全国政治協商會議主席への就任が確実視されている俞正声中央政治局常務委員が講話を行った。
- <sup>22</sup> 「陸對台工作會議擴大政治對話」『聯合報』2013年2月20日。
- <sup>23</sup> 「为何不与中国大陆联手保钓？马英九提三点理由（2013-02-19 08:26）」環球網ウェブサイト (<http://taiwan.huanqiu.com/news/2013-03/3708342.html>)、2013年2月19日閲覧。
- <sup>24</sup> 「馬：釣島主權不會讓步 兩岸不能聯手保釣（2013-02-19 08:52:26）」中国評論新聞網ウェブサイト (<http://www.chinareviewnews.com/doc/1024/4/2/3/102442306.html?coluid=46&kindid=0&docid=102442306&mdate=0219095206>)、2013年2月19日閲覧。
- <sup>25</sup> 「受美压力弃两岸保钓陆高层极不满马英九（2013-03-05 21:50:24）」多維新聞ウェブサイト (<http://taiwan.dwnnews.com/news/2013-03-05/59153048.html>)、2013年3月8日閲覧。
- <sup>26</sup> 「王毅：维护钓鱼岛主权是两岸同胞的共同责任（2013-03-06 21:44）」環球網ウェブサイト (<http://taiwan.huanqiu.com/news/2013-03/3708342.html>)、「两岸同胞共同保钓否则对不起祖宗与后代！（2013-03-07 08:19）」同上ウェブサイト (<http://taiwan.huanqiu.com/news/2013-03/3709033.html>)、2013年3月8日閲覧。
- <sup>27</sup> 「王毅：两岸保钓不同步愧对列祖列宗（2013-03-06 22:28:33）」多維新聞ウェブサイト (<http://taiwan.dwnnews.com/news/2013-03-06/59153412.html>)、2013年3月8日閲覧。
- <sup>28</sup> 「程恩富：应对钓鱼岛争端的五项非军事手段（2013-03-21 02:38）」環球網ウェブサイト ([http://opinion.huanqiu.com/opinion\\_world/2013-03/3753232.html](http://opinion.huanqiu.com/opinion_world/2013-03/3753232.html))、2013年3月23日閲覧。

- 29 「王毅谈今年对台工作关键词：稳步推进全面发展（2013-03-06 21:46）」環球網ウェブサイト (<http://taiwan.huanqiu.com/news/2013-03/3708345.html>)、2013年3月8日。
- 30 「馬總統：擱置主權兩岸都能更進一步」『聯合報』2013年3月8日。
- 31 「今會習近平連戰：須堅持和平九二共識是兩岸深化合作根基交流互動應求同存異北京行將『看看過去、展望未來』」『中國時報』2013年2月25日。
- 32 「习近平总书记会见连战一行（2013-02-25）」中国・国台弁ウェブサイト ([http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201302/t20130225\\_3823738.htm](http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201302/t20130225_3823738.htm))、「胡锦涛主席会见连战一行（2013-02-26）」同ウェブサイト ([http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201302/t20130226\\_3829734.htm](http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201302/t20130226_3829734.htm))、「贾庆林会见连战一行（2013-02-26）」同ウェブサイト ([http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130301\\_3841711.htm](http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130301_3841711.htm))、2013年2月27日閲覧。
- 33 「連戰訪中今首度連習會比照連胡會」『自由時報』2013年2月25日。
- 34 同上資料「习近平总书记会见连战一行」。
- 35 同上資料。
- 36 「一個中國、兩岸和平、互利融合、振興中華連習會連戰提兩岸16字原則」『聯合晚報』2013年2月25日、「連習會登場習近平：兩岸是命運共同體台灣參與國際活動受限制習稱要有足夠耐心尋求化解連盼兩岸關係在新起點加以深化」『中國時報』2013年2月26日、「連戰會見習近平提兩岸關係16字箴言（2013-02-25 17:35:47）」中央日報網路版ウェブサイト ([http://www.cdnews.com.tw/cdnews\\_site/docDetail.jsp?coluid=111&docid=102218138](http://www.cdnews.com.tw/cdnews_site/docDetail.jsp?coluid=111&docid=102218138))、2013年2月26日閲覧。
- 37 前掲資料「胡锦涛主席会见连战一行」。
- 38 「連戰：政治對話談判無可避免(102022613:39:51)」中央通訊社ウェブサイト (<http://www.cna.com.tw/News/aCN/201302260157-1.aspx>)、2013年2月26日閲覧。
- 39 「針對『連習會』連戰十六字基本原則之回應（2013-02-25）」民主進步党ウェブサイト ([http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?sn=6493](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?sn=6493))、2013年2月26日閲覧。
- 40 「馬：未託連戰任何任務」『中國時報』2013年2月27日。
- 41 「王郁琦：政治協商非優先事項」『工商時報』2013年2月27日。
- 42 前掲資料「馬：未託連戰任何任務」、「總統府：連戰『一個中國』說未知會馬」『聯合報』2013年2月27日。
- 43 「李佳霏：府發言人沒有個人意見（2013/3/1）」自立晚報ウェブサイト ([http://www.idn.com.tw/news/news\\_content.php?artid=20130301abcd016](http://www.idn.com.tw/news/news_content.php?artid=20130301abcd016))、2013年3月1日閲覧。
- 44 「温家宝在十二届人大一次会议作政府工作报告(实录)（2013年03月05日 10:53）」中国新聞網ウェブサイト (<http://www.chinanews.com/gn/2013/03-05/4616016.shtml>)、2013年3月6日閲覧。
- 45 「李克强总理等会见采访两会的中外记者并回答提问（2013-03-17）」中国・国台弁ウェブサイト ([http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130318\\_3914646.htm](http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130318_3914646.htm))、2013年3月18日閲覧。
- 46 「人代会决定国务院其他组成人员（2013-03-16）」中国・国台弁ウェブサイト ([http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130317\\_3912568.htm](http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130317_3912568.htm))、2013年3月17日閲覧。
- 47 「张志军同志任中共中央台办国务院台办主任（2013-03-17）」中国・国台弁ウェブサイト ([http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130317\\_3914377.htm](http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130317_3914377.htm))、2013年3月18日閲覧。
- 48 「俞正声当选全国政协主席杜青林等23人当选副主席（2013-03-11）」中国・国台弁ウェブサイト ([http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130311\\_3887938.htm](http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130311_3887938.htm))、2013年3月17日閲覧。
- 49 「楊潔篪升任國務委員預料將接對台事務（2013年03月17日 10:37）」ETtoday 東森新聞雲ウェブサイト (<http://www.ettoday.net/news/20130317/176364.htm>)、2013年3月17日閲覧。
- 50 「新聞眼／尋找新支點先『合情合理』看待台灣」『聯合報』2013年3月18日。
- 51 「王毅谈他的“两岸梦”（2013-03-17）」中国・国台弁ウェブサイト ([http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130318\\_3918746.htm](http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130318_3918746.htm))、2013年3月12日閲覧。
- 52 「張志軍接國台辦主任王毅：訪台時機成熟」『聯合報』2013年3月18日。
- 53 「张志军在第十一届两岸关系研讨会上的讲话（全文）（2013-03-22）」中国・国台弁ウェブサイト ([http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130322\\_3980522.htm](http://www.gwytb.gov.cn/wyly/201303/t20130322_3980522.htm))、2013年3月24日閲覧。
- 54 「張志軍：希望有機會到台灣(1020322 12:30:45)」中央通訊社ウェブサイト (<http://www.cna.com.tw/News/aCN/201303220121-1.aspx>)、2013年3月22日閲覧。
- 55 台湾・行政院大陸委員會新聞稿「陸委會：大多數民意支持兩岸大眾傳播與新聞領域的交流互動，兩岸應致力完善兩岸新聞資訊交流環境，讓兩岸人民共享資訊完整流通（日期：民國102年3月22日）」、「『民眾對當前兩岸關係之看法』例行性民意調查問卷各題百分比配布表（調查日期：2013年3月37日至10日）」、「『民眾對當前兩岸關係之看法』民意調查（民國102年3月7日～10日）結果摘要」陸委會ウェブサイト (<http://www.mac.gov.tw/ct.asp?xItem=104126&ctNode=6409&mp=1>)、2013年3月24日閲覧。
- 56 上記資料（行政院大陸委員會新聞稿）。

- 57 「『民眾對當前兩岸關係之看法』例行性民意調查問卷各題百分比配布表 (調查日期:2013年3月7日至10日)」陸委會ウェブサイト (<http://www.mac.gov.tw/public/Attachment/33221141066.pdf>)、2頁。
- 58 「總統祝賀新教宗當選 (中華民國102年03月14日)」台湾・總統府ウェブサイト (<http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=29403&rmid=514&size=100>)、2013年3月18日閲覧。
- 59 歴代の総統では、陳水扁総統が2003年7月にローマ法王ヨハネ・パウロ2世の在位25周年の祝賀に訪れ、2005年4月には同法王の葬儀に参列している(「歐洲唯一友邦教廷與華關係好(2013/03/15 18:26:00)」中央通訊社ウェブサイト (<http://www.cna.com.tw/Topic/NewsTopic/429-4/201303150076-1.aspx>)、2013年3月16日閲覧)。
- 60 「馬抵梵蒂岡獲元首級禮遇為首位出席教宗就職彌撒的華人國家領導人兩名大禮官接機就職彌撒座位『很前面』」『中國時報』2013年3月19日。
- 61 「總統伉儷率慶賀團啟程前往梵蒂岡 (中華民國102年03月17日)」台湾・總統府ウェブサイト (<http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=29420&rmid=514&size=100>)、2013年3月18日閲覧。
- 62 前掲資料「馬抵梵蒂岡獲元首級禮遇為首位出席教宗就職彌撒的華人國家領導人兩名大禮官接機就職彌撒座位『很前面』」。
- 63 「總統『慶誼之旅』第二天行程 (中華民國102年03月19日)」台湾・總統府ウェブサイト (<http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=29444&rmid=514&size=100>)、2013年3月20日閲覧。
- 64 「馬總統訪教廷陸:盼兩岸慎重(102031522:41:29)」中央通訊社ウェブサイト (<http://www.cna.com.tw/News/aCN/201303150379-1.aspx>)、2013年3月16日閲覧。
- 65 「中共中央政治局召开会议 审议关于改进工作作风、密切联系群众的有关规定分析研究2013年经济工作中共中央总书记习近平主持会议 (2012年12月04日 19:33:54)」新華網ウェブサイト ([http://news.xinhuanet.com/2012-12/04/c\\_113906913.htm](http://news.xinhuanet.com/2012-12/04/c_113906913.htm))、2013年3月28日閲覧。
- 66 「习近平在十八届中央纪委二次全会上发表重要讲话 (2013年01月22日 16:48:56)」新華網ウェブサイト ([http://news.xinhuanet.com/politics/2013-01/22/c\\_114461056.htm](http://news.xinhuanet.com/politics/2013-01/22/c_114461056.htm))、2013年3月28日閲覧。
- 67 同上資料。
- 68 「习近平:决不允許“上有政策、下有對策”(2013年01月22日 15:41:42)」新華網ウェブサイト ([http://news.xinhuanet.com/politics/2013-01/22/c\\_114460744.htm](http://news.xinhuanet.com/politics/2013-01/22/c_114460744.htm))、2013年3月28日閲覧。
- 69 「禁奢令發威公務參訪大縮水」『中國時報』2013年3月24日。
- 70 「大陸禁奢令掃到台灣五星飯店」『聯合報』2013年3月20日。
- 71 「首季業績少1億陸禁奢令打到台灣蝴蝶蘭市場」『中國時報』2013年3月25日。

## 宝塚歌劇団の台湾初公演 ～ 心が通い合う、感動的大成功！

4月6日（土）から4月14日（日）まで、99周年を迎える宝塚歌劇団が初の台湾公演を行いました。一言で言えば、文字通り大成功！幾つもの国から公演要望がある中で、東日本大震災時に台湾から比類なき支援を頂いたので、台湾公演を決定されたとのことですが、公演当日も、日台関係に特有の、温かい心と心の通い合いが強く感じられました。宝塚は、今や日台関係にとって、なくてはならない存在になったと言っても過言ではないと思います。

実は、公演前から前評判は極めて高く、切符は飛ぶように売れたそうです。切符が何とかならないかと私のところにも多くの台湾の友人から照会が相次ぎました。当地の日系企業の方に聞いてみると、若い世代の台湾の女性社員の間で評判になって、切符を買う人が多いとのこと。実際に公演を観覧した際に周りを見ると、確かに若い女性が目につきました。

さて、その公演です。4月6日（土）夜の初演は、今回の台湾公演の実現に大変な御尽力をされた日華議員懇談会の平沼赳夫会長、藤井孝男同幹事長を含む日華議員懇談会所属の国会議員の方々総計7名、更には台湾側もその場で重要会議が開けそうなくらい多くの要人がVIP席に姿を見せる中でスタート。まずは、第1部の「宝塚ジャポニズム」です。ジャポニズムというだけあって、最初は「桜」でした。歌のメロディーにのって華麗な日本の美が展開します。初演の夜、私の斜め前に座っておられた台湾の要人は、日本に留学した際に初めて習った歌が「桜」であったので、今

回の公演の冒頭が「桜」で本当に感激したとのこと。また、その後に出てきた「荒城の月」のシーンでは、私の左隣に座っている中年の台湾の男性と一緒に歌っているのが分かりました。本当に日本と台湾は深く深く結びついているのだと改めて感じた次第です。

続く第2部「怪盗楚留香外伝」は、そもそも台湾公演のために特別に作られた演目でした。そして、その中で、台湾語の有名な歌である「雨夜花」という歌が出てきた瞬間、文字通り会場がどよめきました。私自身も、台湾に対する宝塚の気遣いの深さを感じ入り、誇張でなく、涙が出そうになったくらいでした。

さらに最後の第3部に入ると、舞台が入れ替わってスターが出てくるたびに、特に男役トップスターの柚希礼音さんが新しい衣装で登場するたびに、熱狂的な歓声で会場は更に盛り上がりました。宝塚の関係者によれば、台湾の観客の方々の反応は日本の観客より更に熱く、舞台の上の団員の方々も本当に楽しく演じられたそうです。その舞台は、特に柚希礼音さんが中国語で「月亮代表我的心」を歌うと最高潮に達しました。

更に、初演の夜、カーテンコールで、星組組長の万里柚美さんが「台湾は東日本大震災の際、いち早く多大なるご支援を届けてくださいました。日本への愛を強く感じます。日本を代表して、感謝の気持ちを込め千秋楽まで舞台を務めたいと思います。」と述べた時には嵐のような拍手が鳴り響き、私の右隣に座っていた台湾政府の要人も何

度も何度も頷いていました。お互いがお互いを気遣う日本と台湾。宝塚は、改めてそれを我々に感じさせてくれたと思います。

最終公演の夜には、4回にも及んだカーテンコールで、舞台の上の団員から「台湾を愛しています」「必ずまた来ます」のエールが、中国語で何度も繰り返され、総立ちの会場から拍手がいつまでもいつまでも続きました。本当に感動的でした。また、翌日、あるトップスターの方と話す機会があったので、「次はいつ来ていただけますか」と尋ねたら、「このまま台湾にずっと残っていたいで

す」というお答え。日台双方、本当に心に響くものがあった証だと思います。

なお、17年に及ぶ交渉が続いていた日台漁業協議が、ちょうど今回の宝塚の公演期間中に歴史的な妥結を見ました。この協議にも携わっていた私にとっては、宝塚星組は正に Lucky Star に見えました。宝塚台湾初公演の感動的なまでの大成功、そして日台漁業協議の歴史的妥結を経て、日台関係が幸運の星の下で更に進展することを願ってやみません。

## 編集後記

4月より、藤本の後を引き継いで編集担当となりました鳴海と富岡です。担当者より、それぞれご挨拶させていただきます。

○毎月「交流」をお読みいただきありがとうございます。4月から担当となりました鳴海と申します。どうぞ宜しくお願い致します。

本号では「台北マラソン」を掲載させていただきました。日本では空前のマラソンブーム。一昔前なら42kmを走るのには陸上経験者でしかありえなかった競技が、今や市民ランナーのものとして親しまれています。私も鈍足ながらマラソンに目覚めた1人として、親しみ易く、息切れしない記事作りに努めていきたいと思っております。  
(総務部 鳴海麻里)

○4月より「交流」編集を担当することになりました富岡と申します。実は「交流」編集に携わるのは今回で3度目となりますが、そのたび日台交流がより盛んになっていく様が記事を編集していると実感することができます。

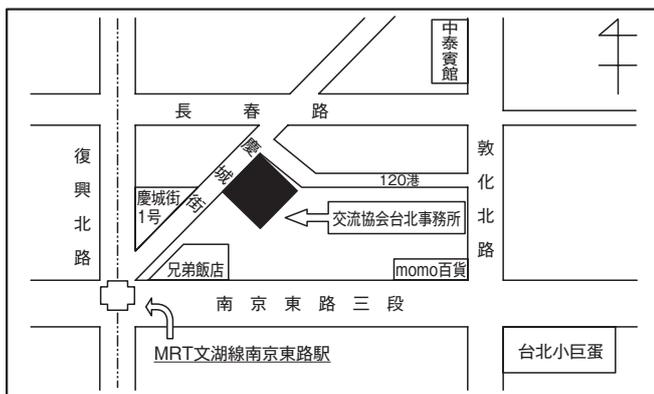
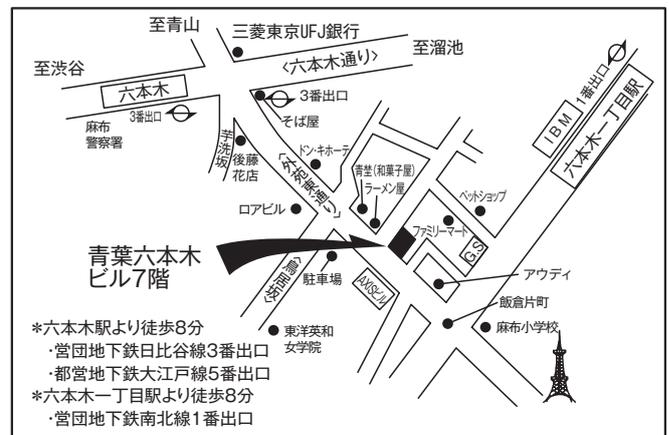
これからも日台交流の架け橋として、また多くの方に「台湾」をより理解して頂ける記事作りを目指して行きたいと思っております。

いたらない点もあると思いますが、今後ともよろしくお願い致します。

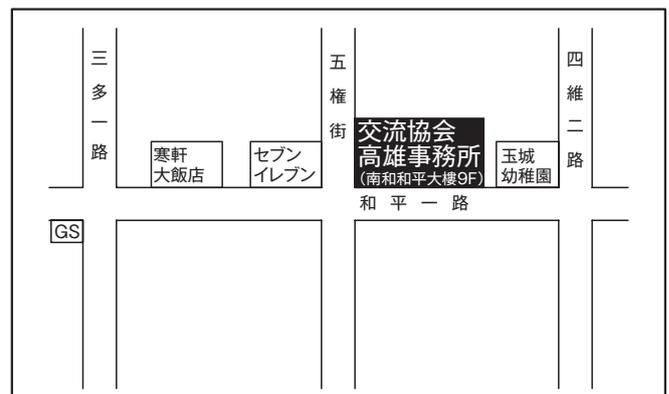
(貿易経済部 富岡明美)

平成25年4月25日 発行  
 編集・発行人 井上 孝  
 発行所 郵便番号 106-0032  
 東京都港区六本木3丁目16番33号  
 青葉六本木ビル7階  
 公益財団法人 交流協会 総務部  
 電話 (03) 5573-2600  
 F A X (03) 5573-2601  
 U R L <http://www.koryu.or.jp>

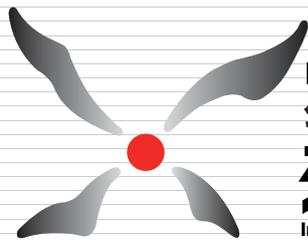
表紙デザイン：株式会社 丸井工文社  
 印刷所：株式会社 丸井工文社



台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓  
 Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei  
 電話 (886) 2-2713-8000  
 F A X (886) 2-2713-8787  
 URL [http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top)



高雄事務所 高雄市苓雅區和平一路87號  
 南和和平大樓9F  
 9F, 87 Hoping 1st Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan  
 電話 (886) 7-771-4008 (代)  
 F A X (886) 2-771-2734  
 URL [http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top)



日本と台湾との架け橋

公益財団法人

**交流協会**

Interchange Association, Japan (IAJ)

